第108回 文學界新人賞発表

賞金五十万円及び記念品

◎受賞作

「白い紙」

シリン・ネザマフィ

Shirin Nezammafi

一九七九年一一月一〇日生まれ。二九歳。イラン・テヘラン出身。神戸大学大学院修了。現在、システムエンジニア。

●受賞のことば

日本で、はじめて親以外の人に「実は……作家になりたいです」と想いを打ち明けることができた懐かしい部屋で、発表の電話を待った。大きくなった植物で多少隠されている先生の顔を覗きながら、これまでの周囲の理解と応援の大きさに、胸がいっぱいになった。

「夢のある人生を」父の言葉から始まった遠い夢の続きを現実で見られるようになったのは、自分以上に自分を信じ、応援してくれた親、先生、友人に巡り会えたおかげだと思う。感謝を忘れずに、これからも夢の続きを書いていきたい。

●選考経過

第一〇八回文學界新人賞は、応募総数一五九四篇の中から下記の五篇を最終候補とし、四月一三日に角田光代、花村萬月、松浦寿輝、松浦理英子、吉田修一の五選考委員によって厳正かつ真摯な選考が行われ、右のように決定いたしました。

●候補作

「川辺の棲家」大岡直也
「カルテル」奥田真理子
「世界数の描く円」佐藤揺
「土公神」髙橋果奈
「白い紙」シリン・ネザマフィ

選評

デリカシー

吉田修一

今回は、シリン・ネザマフィさん「白い紙」に○、奥田真理子さん「カルテル」に（×に近い）△をつけて選考会に臨んだ。前回と比べ、各選考委員の得点にばらつきはほとんどなく、まず大岡直也さん「川辺の棲家」と佐藤揺さん「世界数の描く円」、次に髙橋果奈さん「土公神」が落とされた。

残った「カルテル」と「白い紙」について話し合い、わりと早い段階で「カルテル」も落ちたあと、最終的に「白い紙」が文學界新人賞受賞作として本当にふさわしいかどうかで長い議論となった。

「川辺の棲家」

「いろいろなものが繊細に出来すぎている」らしいマチコさんと、荒川沿いの廃ビルで暮らした日々を、主人公の「僕」が感傷的に思い出す物語。

二人が暮らす廃ビルは上手く書けている。グロテスクな構造が立体的に浮かんでくる。しかし、残念ながらそれだけしかない。主人公にとっては、マチコは特別な存在であり、廃ビルは特別な場所であり、二人で過ごした日々は特別な思い出なのだろう。しかし特別な日々というのは、その時点で特別なわけではなく、のちに「特別」へと昇華されるものではないだろうか。この主人公とマチコが思い出の中、虎視眈々と「特別な日々」らしく過ごそうとする様子は、正直、読んでいて鼻白む。

「世界数の描く円」

金を貸した女友達や予言者、アジア放浪から戻ったばかりの男などと出会いながら、主人公「私」が理不尽な出来事に巻き込まれていく物語。

全編に、あまり面白いとは思えないノリツッコミ？　がちりばめられている。たとえば、年配の女性と一緒に電車に乗った「私」（二十代前半）が周囲の視線を気にする場面。

同じ職場のパートのおばさんとアルバイトの子、もっともらしいとしたらそんなところかもしれない、というような思考はだけど自意識過剰ってやつで、べつに、誰も、私たちの関係なんか知ろうとはしないでしょ？　私が、あなたたちの成りたちにまるで興味がないのと同じく。

主人公「私」以外の登場人物たちが、まるで小道具のように扱われている。そのせいか彼らに対する「私」の投げやりで無神経な悪態が、自分の思い通りにならないおもちゃに癇癪を起こしている子供にしか見えない。

「土公神」

就職難で地元（東北？）に戻った主人公「私」が、ハニハニ園の洞窟に展示された埴輪を夜な夜な齧るらしいムグロ（モグラ？）退治のバイトに勤しむ物語。

主人公とバイト仲間・寛輔とのやりとりにリアリティがあって面白かった。実は埴輪を齧っていた犯人が園長の奥さんだったというオチにはまったく響かなかったが、熱にうなされる寛輔に、夜に溶け込んでしまう恐怖とムグロを殺す恐怖の間に違いはないと諭す場面や、自分が布団の中でムグロになってしま

う場面などは説得力があった。
ただ、どうしても説明的な文章が多すぎる。たとえば、
私達の生活は、紛れもなく「物語」ではあるが、それは劇的なクライマックスや結末が用意されているものではない。どこで暮らそうが、冴えない自分は冴えないまま、人生の主人公はチェンジ出来ない。
ということを書きたいのならば、そこをきちんと「小説」にすべきではないだろうか。
「カルテル」
映画版「嫌われ松子の一生」から歌と踊りを取り払ったような印象の小説。ある風俗嬢の半生としては、母親を流産させたり、鬱の恋人ができたり、顔に硫酸をかけられたりと、派手なエピソードが盛りだくさん。この盛りだくさんなエピソードを、冒頭、読みづらいながらも徐々に癖になる文体で語っていく。
前の三編と違って、主人公と作者の間にある程度の距離があるせいか、前の三編が自分（主人公）以外を無神経に攻撃するものだとすれば、こちらはその攻撃対象に主人公も含まれているという点において、多少評価できると思い△をつけた。
真面目に勤務している風俗嬢の、たとえば休憩時間、その頭の中を覗いた景色（ファンタジー？）として読めば、面白味はある。実際、唐突に挿入される仕事風景などは、他の箇所がファンタジーな分、妙に生々しかった。ただ、受賞作として致命的に物足りなかったのは、各エピソードに新鮮さが全くないことだと思う。
ということで四編が落ち、「白い紙」が残った。
まず感心したのは、作者が持つイメージだ。時にリアル過ぎ、幻想的でさえあった。この観察力は、他四編の作者には残念ながらなかったもので、作家として信頼に足るものだと思う。また冒頭主人公である少女が教室から窓の外を眺める場面から、ドアの隙間越しの短い逢瀬、そして二十一台のトラックが村を出ていくラストまで、描写される光景が徹底して何かで切り取られている。ちょうど主人公がいつも巻いているチャドル（イスラム教徒の女性が頭や顔に巻く布）の中から、世界を眺めているような感じだ。普通のカメラアイではなく、そのレンズに更にチャドルを巻いたとでも言えばいいのだろうか。
戦時下の若い男女の淡い思い。内容を簡単に纏めればそうなる。実際に読んでもらえば分かるように、決して新しさは感じない。しかし、新しさは感じないが、不思議と古さも感じなかった。僕らが暮らしている現代日本にはこのような物語を持った人が、間違いなく隣人として暮らしている。これら物語が日本語で語られる時、それはもう外にあるのではなく、すでに内にあると言えるのではないだろうか。
他の四編の候補作が、自分の言いたいことを言いたいように書いた小説だとすれば、この「白い紙」だけは、何か言えないことを、隅々にまで神経を使いつつ、そっと告げようとした小説だと思う。この作品を読むと、「デリカシー」という、どこか懐かしい言葉が浮かんでくる。
もちろん全体的に行儀が良すぎる。日本語も荒い。イランを舞台にしたイラン人の物語ならば、翻訳小説でいいと言う人もいるかもしれない。しかし、この作品が持つ「デリカシー」は、今回、他の作品を圧倒する新鮮さがあった。結論として、この「白い紙」を文學界新人賞受賞作に強く推すことにした。

選評

小説との格闘

角田光代

もしかして今、小説を書くということは新人にとって非常にむずかしいことなのではないかと、少し前から思っている。新人賞の選考会で読む小説が、非常にちいさな世界のさらに細部を、緻密に書いたものばかりだからである。書くべきものごとはすべて既に書かれてしまっていると、新たに小説を書く人は感じているのではないか。だから、新しいもの（まだ世に発表されていないもの）といえば自身の感覚、感性だけで、それを頼りに、まだ書かれていない細部をさぐりあてていくしかないと、そう思っているのではないか。そのことを、今回はとくに強く思った。
でも、自身の感覚や感性は、そんなに信用に足るものではない。もしかして凡庸で退屈なだけかもしれない。すでに持っている自身の感覚、感性、また言葉は、小説を書くときに「使う」よりもむしろ、「闘う」ものだと私は思っている。自身を徹底的に疑って、闘って、すでに持っているものを超えなくては小説は生まれない。
「川辺の棲家」、「世界数の描く円」、「土公神」、それぞれにいいところはあるけれど、私には、どうしても世界が閉じているように思えてしまった。ちいさな世界を、作者の感性でもって道案内してもらっている印象。そうしてそのちいさな世界が、さほど魅力的には感じられなかった。
「カルテル」と「白い紙」の二作には、ちいさな世界を蹴破っていこうという意志が感じられた。「カルテル」は、だめさ、弱さを憎みながら、その場に留まり続ける主人公も、また、小説の持つふてぶてしさも私には魅力的だった。
主人公を取りまく諸々のエピソード（母と祖母の言葉、母を階段から落とした過去、風俗嬢という職業、そこにやってくる精神的に不安定なのちの恋人、等々）が目新しくなく、既視感があり、けれどぜんぶがぜんぶそうなので、もしかして作者は、今まで読んだり見聞きしたりしたもののパロディで主人公を形成させようとしているのかと思い、興味を持ったのだが、しかしそれにしては、作者の作為めいたアクやえぐみといったものが感じられない。それが感じられないと、ありがちな設定の寄せ集めになってしまう。
「白い紙」は、イラク国境近くの町に一時的に引っ越してきたイラン人少女の目線で語られる、青春小説とも呼べるような作品である。私がここで強調したいのは、この小説がちいさな世界を蹴破ろうとし、それに成功しているのは、戦争という非日常の緊迫がその国の出身者によって描かれているからでは、ない、ということだ。
描写力が優れている。湿度や気候、土埃や血の匂い、喧噪といったものを、こちらの五感を刺激するように作者は描き出す。手を引かれ案内されている場所が、ちいさな狭い場所ではなく、未知の場所だとわかる（もちろん異国という意味での未知ではない）。一人称をいっさい使わないことで、作者は小説と格闘している。ときどき闘い疲れたような箇

所もあるのが残念。

ラストは予定調和的で定型だが、けれど照れのないストレートな強さがある。該当作なしでもいいと思う選考委員もいるはずだが、私はそれは避けたかった。受賞作を決めるとしたら、この作品しかないと思った。

選評

うちのめされたいと思う

松浦寿輝

低調であった。五篇のうち四篇は問題にならない。

大岡直也「川辺の棲家」は、東京の荒川べりの廃ビルで謎めいた年上の女と暮らした過去の日々をめぐる「僕」の回想。保坂和志ふうの人間関係を村上春樹ふうに多少洗練させ（そのぶん当然つまらなくなる）、「記憶」や「偶然」をめぐるとりとめのない省察の挿入でそれがさらに薄まって、何とはなしの小洒落た「気分」だけが残る。物語の舞台のロケーションがとても良いのに、川の流れの音が響いてこないし水のにおいが漂ってもこない。同棲相手の「マチコさん」も魅力に乏しい。「末っ子のアリさん」をめぐる空想的寓話をべらべら喋ったり「私とあなたが出会ったことは偶然でもあり必然でもあるわ」と口走ったりする文学気取りの不気味な女（男も）は、存外世の中に沢山いるものだ。

奥田真理子「カルテル」は、自宅が火事で燃えるわ、妊娠中の自分の母親を階段のてっぺんから突き落として流産させるわ、ストーカーの男から顔に硫酸をぶっかけられるわ、マンションの十五階から身を投げるわ、あれこれてんこ盛りのおふざけ漫画のような作品で、一応するすると読めてしまう。審査会では語りのリズムという点で野坂昭如の名前が出たが、西鶴と織田作之助をベースに細心に練り上げられた、緊密かつ野放図なあの天才的野坂節に比肩しうるものがここにあるとは思えない。自堕落とだらしなさへの居直りは、野坂氏の場合、本当に破滅してもいいと腹を括っている省の必死の演技であり、その緊張を欠いたとき、単に自堕落、単にだらしない漫画へとすべてはばらけてしまう。

佐藤揺「世界数の描く円」は、不在の女友達を求めて右往左往する「私」が正体不明の男女と次々に出会っては別れてゆくお話。心理の深みにはまらないままつるつると上滑りをつづけるこの移動感は悪くない。が、移動したから何なのだという疑問は残る。主人公が出会う男女の造型も思わせぶりなわりには平板かつ平凡で魅力がない。結末の二十行ほど、物語の運動が突然止まり、田舎の駅の朝の情景のうちに抒情的に停滞するのが、単に終らせるための終りのようでわたしには納得が行かなかった。

高橋果奈「上公神」は、手製の埴輪を展示する「ハニハニ園」に雇われて、「ムグロ」（モグラの訛りだろうか）殺しのアルバイトをするお話。埴輪を齧っていた犯人は実は「ムグロ」ではなく、異食症を病む「園長」夫人だったというのが結末の種明かし。これまた、だから何なのだ、の類であろう。小さな小さな閉所で起こった、小さな小さな物語。いみじくも、語り手の「私」は終り近くでこう嘆息する――「どうせ、皆どう足掻いても幸せからは逃れられない。ここは昔からそういう場所なのだ。どこにも行き着けなくなっても、この場所には私の寝床がある、仕事場がある。[…] 特別な物語も、新しい命を孕むことも、私は望みません。血湧き肉躍る喜びも、圧倒的な悲しみも欲しがりません」。「そういう場所」から思いきり隔たっていることの爽快感を味わわせてくれるのが、最後に残った一篇、シリン・ネザマフィ「白い紙」である。イラク国境近くにあるイランの小さな町を舞台にしたこの「青春恋愛小説」に、思わせぶりなものはいっさいない。小賢しいアイロニー、しゃら臭い饒舌もいっさいない。その代わりにひたむきな純愛があり、恋人たちを引き裂く苛酷な政治がある。思いを寄せる少年の首すじに浮き出た「血管の上に、指を載せてみたい」と想像することの血の沸き立つような喜びがあり、彼を乗せて遠ざかってゆくトラックを見送ることの「圧倒的な悲しみ」がある。絶えず空爆の脅威にさらされている戦時の危機感があり、イスラム教の抑圧的な習俗をかいくぐって恋人と心を通わせようとする瞬間のせつない緊張感がある。こうしたすべてに、文学的主題として、「皆どう足掻いても幸せからは逃れられない」現代日本のたるんだ日常が太刀打ちするのは難しい。

審査会でわたしは、一昨年、楊逸「ワンちゃん」が同じ場で俎上にのぼったとき述べたのとほぼ同じことを繰り返す羽目に陥り（当時の選評を参照されたい）、そして、そのときと同様、積極的に推す気はないが受賞に反対はしないという立場を表明した。

今回、「白い紙」について特に言いたいことは、肯定的と否定的の二点がある。第一に、視点を一人称に置いた小説なのに「私」等の一人称主語を徹底的に抹消しており、そこに、日本語の特性を踏まえたうえでの意識的な文章作法が見られるという点である。第二に、楊逸氏の作品が中国と日本の間の経済格差や文化摩擦を背景に持ち、そこに、二つの国のはざまに生起する悲惨にして滑稽な物語を中国人が日本語で書くことの政治的意味が炙り出されていたのに対して、「白い紙」はイランに住むイラン人の物語をイラン人が書いただけのことでしかなく、これならペルシャ語で書こうが英語で書こうが同じことではないか、という肩すかしの印象である。ネザマフィ氏が今後の作品で、自分にとっての外国語で自己表現することの意味を追求してゆくことを期待している。

かくして、映画的な見せ場（「ハサーン！」）を狙う山っ気も抜かりなく滲ませた古臭いステロタイプの「青春恋愛小説」の受賞が決まった。気持の盛り上がらない、どこかもの哀しい審査会であった。決定の後の食事の席でも、気分を引き立ててくれようとする編集サイドの明るさと対照的に審査員たちの口数は少なかったと記憶する。わたしたちを動揺させ、憤激させ、哄笑させ、茫然自失させ、猛然と嫉妬させてくれる作品を読みたいと思う。うちのめされたいと心から思う。

千葉市美術館で「大和し美し」展開催中！

大和し美し（やまと）
川端康成と安田靫彦（うるは）

監修／川端香男里・安田建一

形見とて 何残すらむ 春は花
夏ほととぎす 秋はもみぢ葉

良寛の辞世の句に導かれ、文豪川端康成と画家安田靫彦の魂が触れ合う。
往復書簡、川端・安田が残した珠玉の言葉、安田靫彦愛蔵の良寛の書、安田靫彦作品、川端・安田の美術コレクション 豪華掲載！

●A5判並製本 四六八頁 二、六二五円（税込）

求龍堂 〒102-0094 千代田区紀尾井町3-23 文春ビル新館7階 TEL：03-3239-3381 FAX：03-3239-3376

選評

切実さの表われ方

松浦理英子

戦争や政治的動乱を背景にした小説が、平和時の日常を背景にした小説よりも、常に重く切実な問題を孕み深い読後感を残すとは決まったものではない。シリン・ネザマフィ「白い紙」はイラン・イラク戦争と思われる戦争下での少年少女の別れを描き、他の四つの候補作は現代日本を舞台にしているが、主人公にとっての切実さということを言うならば、「何度となく死にたい気分の朝を乗り越えてきた」と独白する「世界数の描く円」の主人公も、「私は生産側には向いていない」「自分の胎内で、自分の細胞を基にして自分とは異なる人間を育て上げて外界に産み落とすなんてこと、恐れ多くて出来るわけがない」と述懐する「土公神」の主人公も、祖母におまえはみだらでふしだらな女になると言われながら育ち、性交を避けつつヘルスで働く「カルテル」の主人公も、それぞれ現実の切実な重さと向かい合っている（唯一「川辺の棲家」の主人公は幸福そうである）。

暮らし向きの豊かさを見ても、「土公神」の主人公が、東京ではどこのスーパーマーケットにでも売っているズッキーニが手に入りづらい地方に住み、「肉料理にローズマリーを添えてオーブンで焼く」ことを日常的と思えない環境・階層に属し（頻繁ではないにしても、たまのご馳走としてその程度の料理を作る家庭はそう珍しくはないと私は思う）、モグラ（作中では「ムグロ」）を叩き殺すアルバイトに従事しているのに対して、「白い紙」の主人公は裕福な医者の娘なので、（週の大半を家を離れ最前線の兵士の治療にあたる父親をねぎらうためだが）貴重品である肉を二キロも買い、さまざまな料理の皿がいっぱいに並んだ食卓につくこともできるのだから、より恵まれた生活を送っているのはどちらなのか、簡単に判断を下すことはできないだろう。

だから、「白い紙」に注目したのは戦争という深刻な題材ゆえではない。だいいち、戦争文学としては端正に定型を踏んでいる印象でさほど新鮮味がない。定型なだけに、最後の別れの場面などは映画さながらに美しいテーマ曲が聞こえて来そうで、確かに胸を打たれるのだけれど、こんなふうに感動のツボを押してきれいに終わるのでは読者が気持ちよくなり過ぎるのではないか、という疑問が浮かぶ。せめて最後に一行あけて、「二年後、先生は私の夫となった」とでもつけ加えれば——というのは冗談だが、戦争を描いて読者に悲しい涙を気持ちよく流させる小説は、やはり甘いし弱いのである。

「白い紙」を多少の保留つきで評価した理由はいたって単純で、五本の候補作の中で基礎的な能力が最も高かったからだ。定型をしっかり支える観察力と描写力があり、イランもしくはイスラム固有の事物が登場する時には、さりげなく文中に説明を織り込む洗練された文章構成力がある。ユーモラスなエピソードもあれば、主人公母子が二キロの肉を買う際に肉屋の店員に「敵の兵隊にでもディナーの用意か？」と強烈な嫌味を言わせるというような、自己を突き刺す視線も備えている。

他の候補作の多くに致命的に欠けているのは、この自己を突き刺し、笑い、相対化する視線だった。小さく狭い世界の中心に鎮座した主人公が、自分の問題をだいじそうにかかえ、基本的に受け身の姿勢で周囲を見回しているだけで、時に他人の起こす事件に巻き込まれても、痛い目に遭うわけでもなければ、自分の問題に対する新しい視点を得るわけでもなく、あまりにも主人公も小説も動かないので、切実な問題をかかえていようとも結局、曖昧な自己肯定の気分がずるずると垂れ流されているだけのように見える。せっかく苦しんでいるのに、貧しい暮らしに甘んじているのに、そんな小説の作り方ではもったいない。

日本も日本人も登場しない「白い紙」には、翻訳文学を読むような感じがつきまとうのだが、心憎いことに、主語がなくても成立する日本語の特質を生かして、全編「私は」という一人称の主語を使わない文章で通すという、こなれた技術を披露してもいる（「私の」「私に」といったことばは出て来る）。イラン出身者が日本語を使っていること、二つの言語と文化を知っていることをさらに有効活用した刺激的な小説が、この作者によって書かれる可能性は高い。

他には「カルテル」が、主人公のこだわる問題の中に閉じ込めることなく、小説をダイナミックに動かすのに成功していたが、残念ながら今一つ焦点が絞りきれていないように感じた。別名での以前の候補作を思い返しても、ある程度の力を備えた人だとは思うのだけれど、いずれの作品も決め手を欠き、既成の小説から集めた要素のコラージュのように映るのは、作者が自分自身の主題をいまだ発見していないせいか、どうなのか。

選評

小賢しい日本語、愚直な日本語

花村萬月

川辺の棲家大岡直也世界数の描く円佐藤揺両名小説にスタイルしかない罪により磔獄門に処す選考時両名には選考委員全員が×をつけたこれは梟首以外にない以上。うたく句読点を打つのも勿体ないわい。よほどこれで放擲してやろうかとも思ったが、これから応募する者のためにあえて書いておく。模倣からはじまる。それでいい。それでいいが、先達のスタイルを踏襲して模範解答を書いたつもりだから痛い。アホか、おまえらは。ほんとに頭、悪いな。だいじょうぶかよ。一応は文學の新人賞だぜ。とりわけ大岡直也よ、おまえは大きく考え違いをしている。文学における正解って、なんなんだ？　威張って言うこともないが俺は村上春樹を読んだことがない。読む必要も感じない。貴君は他選考委員によると村上春樹亜流だそうだ。こんなものを最終に残す編集部も編集部だが、貴君は人間が筒だと吐かしたのだから、せめてマチコさんのスメグマの臭いを書かなければならなかった。ちなみに選考のときは「人が筒ならば、マチコさんのウンコが見たいもんだ」と呟いたよ。佐藤君。ミラジーノはやばいだろう。いままでの受賞作を解析研究した痕が散見できてしらけきってしまった。人生、せいぜい要領よく泳いでくれたまへ。

安心するなよ〈上公神〉高橋。おまえには俺が△をつけたが、あとはぜんぶ×だ。なぜ△をつけたかといえばハニハニ園からかの偉大なるハニベ巌窟院を連想したからで、おまえがハニベから想を得たのは疑いようのない事実、なんせハニベとは埴輪をつくる人のこととハニベ巌窟院のホームページにある。高橋はハニベを訪れたのか？　あの執念に困惑したのか？　そのあたりはよーわからんが、ハニベが大好きな俺には具体的なヴィジュアルが脳裏に泛んだこと、それに加えて東北に

は友人が幾人かいるので訛りに対してやたらと点数が甘いということ。それで△。たぶん他選考委員からお叱りの言葉があるだろうから、俺はこれ以上書かない。

受賞作〈白い紙〉シリン・ネザマフィ。俺は積極的に評価もしないが、受賞には反対しないというあたりで選考にのぞんだ。そうしたら案の定、受賞した。外国人であるがゆえに日本において他者の視線にさらされることからきているのか、それとももって生まれた資質か、区切られた世界をよく見ている。読んでいて「なんだ、大東亜戦争当時の日本といっしょじゃねえか」といった感想をもった。生まれてもいねえくせによく言うよ――と自分に突っこんだ。ついでになぜか原節子の貌が泛びもした。日本語はもっとうまくならないとね。無駄な繰り返しで引っかかった。ただ、悪達者なスタイルだけのもののなかで、きっちり物を語る愚直な方法が評価された。日本語を自在？　に操れる日本人が恰好のみのハリボテを得意げに提示するなかで、イラン人が多少なりとも中身入りのなにものかをつくりあげようとしてみせた、ということだ。安直な筋書は、俺にはちょっと耐えられないけれどね。あと『私』という主語を排した一人称の文章はイランの言葉からきているのか、それとも小説的な技巧なのか、それとも偶然やっちゃったのか、それを知りたい。ともあれ日本語に主語はいらないということをイラン人が見事に示してくれた。英語をはじめとするインド・ヨーロッパ語系統の言語の日本語に対する悪影響については、すこし自分も考えたい。ちなみに俺が子供のころに世話になったフランス人宣教師は、自国の言葉が「主語に呪われている」と囁いた。

奥田真理子〈カルテル〉をいちばんおもしろく、愉しく読んだ。野坂昭如大兄の文章に似てきたね、響堂コウ、いや奥田真理子（どうやら兎好き）。筆名をあらためたんだね、うん、いい感じになった。名前が変われば書くものも変わる。で、書かれたそばからその言葉が次の言葉を生むといった按排の文章、思いのほか読みやすく、他の作品にはない律動があって俺はとても気に入った。気に入ったが、選考会にむかう新幹線の車中で再読したら俗、いやこの通俗は意図されたものなのか、それともなーんにも考えていないのか、見分けがつかなくなってしまった。意図されたものならなかば無理遣りな御都合的バランス取りも許容するが、そうでないとすると微妙な引っかかりを覚える。通俗であってはいけないといっているのではないぞ。通俗、大歓迎。ただし、作者は常になぜ、そう書くのかを自分に問いかけていなければならない（と、書いて、かゆくなっちゃったが）。それと結末だ。飛ぶのは、どうかな。このお仕舞いの処理は、悪い通俗だよ。これは最初に読んだときから引っかかった。大きな疵だ。映画、マンガ、その他のジャンルに毒されて、小説の機能を忘れちゃったみたいだね。こういったヴィジュアルに毒されちゃった作品がプロアマ問わず多々あって、ああ、もったいない。最後なんて、放置プレイでいいんだよ。俺はあなたに肩入れしているが、あえて受賞も奨励賞も未来に先送り。次の最終選考で、さらに進化したあなたの作品に逢えることを愉しみにしている。会えるではなく逢えるであることを意識して、あなたの脳裏の映像を言語化する作業をするときは、常に文字を意識し、ヴィジュアルに搦めとられない、つまり隷属しないことを強く意識してください（会うと逢うではぜんぜん見える絵がちがうでしょう。じつは、こんなちいさなことなんだ、小説って。わかりやすすぎて、ちょい恥ずかしいけどね）。奥田さんのようなヴィジュアルが先行しがちな小説家は、絶版だけどルネ・ユイグ〈見えるものとの対話〉全三巻を読んでみるといいね。

文學界 新人賞

第109回 原稿募集

本賞は有為の新人のために新しく道をひらき、現代日本文学に新風を吹きこむべく創設されたものです。石原慎太郎氏をはじめ、丸山健二、松浦理英子、木崎さと子、南木佳士、米谷ふみ子、青来有一、吉田修一、若合春侑、長嶋有、吉村萬壱、絲山秋子、モブ・ノリオ、楊逸氏など、多くの作家がこの賞からデビューしています。既成にとらわれぬ清新な作品を期待します。受賞者には、賞金五十万円および記念品を贈呈します。

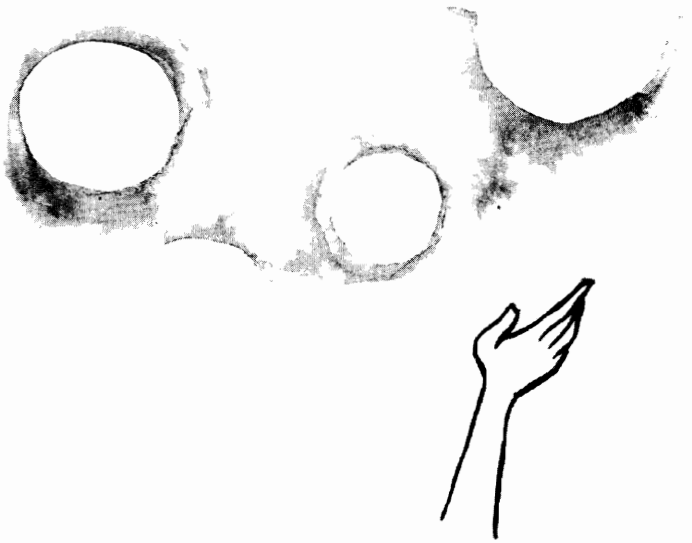
［選考委員］
角田光代
花村萬月
松浦理英子
吉田修一

【募集要項】
●応募作品は新人の未発表原稿に限る。同人雑誌に発表したもの、他の新人賞に応募したものは対象外とする。
●枚数は400字詰原稿用紙100枚程度。ワープロ原稿の場合、A4判の紙に印刷し400字詰換算の枚数を明記のこと。
●原稿には、表紙に題名、枚数、筆名、本名、住所、電話番号、年齢、現職、略歴を明記し、必ず右肩を綴じること。（これらの個人情報は、候補作・受賞作の発表、該当応募者への連絡のために利用し、選考後、直ちに廃棄いたします）
●応募要綱、選考についての問い合わせには一切応じられません。また一旦応募した作品の訂正は受け付けません。応募作品は返却いたしませんのでご了承ください。
●新人賞受賞作の複製権（出版権を含む）、公衆送信権等は、㈱文藝春秋に帰属します。

【締切】
平成21年6月30日（当日消印有効）

【宛先】
〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23 文藝春秋　文學界編集部
文學界新人賞係

【発表】
「文學界」平成21年12月号。（同年11月号に予選の通過者と作品名を発表します）



白い紙

――第108回文學界新人賞受賞作――

シリン・ネザマフィ

一

見張り役の八十過ぎのおじいさんが門の横、いつもの鉄パイプの椅子で居眠りをしている。胸にくっついているモジャモジャな真っ白いヒゲの周囲を一匹の蜂がウロウロしている。着陸に最適なポイントが中々見つからないようだ。彼の後ろ、道路を挟んだ向かいの建物、ガラスが割れている一階の窓の枠に、鳩が二羽体をくっつけて仲良く座っている。壁の茶色いレンガの間から草が生えて、がらんとしている二階のベランダから建物を支配している何百羽もの、鳩の羽が宙を舞っている。この建物は戦争が始まるまで、絨毯の糸を作る工場だった。〝神のため、国のため〟という台詞が首都の放送局に流れ出す前から、本物の信者たちは工場を閉め、ヤーアッラーの鉢巻を巻いては戦争に出た。

工場の前に、車体の色が所々剝がれ落ちている青いジープが駐車されている。四輪にタイヤがなく、ホコリで曇っている前の窓ガラスにはクモの巣の形をした大きなヒビが入っている。駐車というよりも放置されている状態だ。今時、タイヤは戦場で一時的な基地を作るのに欠かせない物資なため、この辺りではタイヤが健在の車は貴重だ。

「そして、彼が杖を上げ、大きな声でこう言った〝海よ、開け！〟」先生の高い声がクラス中に響く。

窓から外を眺めながら、出るあくびを手で隠す。だるい。この時間、男子ブロックはイスラム教の授業を、そして先生不足のため、同じ部屋の片側に集められている下の学年の女子は数学の自習をやっている。自習の時間はいつもだるい。

なにより部屋の空気の重苦しさがだるさを増す。口を大きく開け、肺いっぱい分の酸素を吸い込んだ。八十人も閉じ込められているこの小さな部屋では窓の近くに座っていても、吸い込める酸素が足りない。

教室の前では先生が遠い昔机だった鉄製の何かにもたれかかって、開いている本を棒読みしている。もたれ掛かっているそのポーズ、血が通っていないと思われるぐらいに真っ白な肌と細すぎるせいで顔の両側から飛び出ている頬の骨を、この角度から見ていると人間よりもローマ時代の彫刻の失敗作に似ている。先から続いている単調なトーンが内容に興味を誘わない。その分、変化のない声が子守唄のように聞こえてくる。自習の計算を忘れて、眠りたい。

机の上で腕を交差した。色んな人が名前を刻み込んでいる机の表面の古いトゲトゲが袖を通して、腕を突っつく。少し痛い。交差した両腕の間に出来上がった凹みに顔を置いた。窓の方を向いた。視線が低くなって、外の景色が絞られた。門のおじいさんと蜂が視界から消えた。

その代わりに門の近く、壁の前の枯れかけている校内唯一の木の枝が風で少しずつ揺れるのが見える。

「そうすると、モーセは再び両手を上げ、みんなを誘った」

ゆっくり揺れながら、スイングを描く木の枝を目で追う。先生がさらに続けた。

「その杖が信者によって大切に守り抜かれてきた。現在はイスタンブールにある博物館で大切に保存されている」へー、そうだったのか！　先生の発言が眠る寸前の脳に、一瞬引っかかったが再び流された。

だがこの発言に女子が壊れた楽器のようにざわめき始めた。男子の授業なのに、数学の自習と関係ないのに。「え！　木の杖でしょう？」、「いくらなんでもたかが木の杖が二千年以上も前から無事でいられるの？」、「うそじゃないの？」そんな発言があちらこちらから聞こえた。

「静かに！」先生の単調なトーンが一気に鋭くなった。

「自習をしないと、テストを出すぞ！」先生が本を見ながら、高い声で言った。魔法の言葉に女子が、スイッチが切られたかのように、一斉に静まり返った。

この辺りでは、大学まで、女子の先生は女性である。先生不足のため、今は男性が女子を指導している。だが、この先生は、恥ずかしがり屋なのか、自分に自信がないのか、全くと言っていいほど、女子の方を振り向かない。

再び外を向いた。枯れかけている木の後ろの壁を一匹の猫が歩いている。体全体が真っ黒で前足の先だけが白い。この距離から顔がよく見えないがお尻に尻尾がないのは解る。

数年前、一匹の子猫が、不運にも路上でサッカーをしていた意地悪な子供達に捕まえられ、尻尾にガソリンまみれの布を巻かれ、放火されたらしい。火から逃れようと体を必死にひねり暴れ回った子猫が子供たちの爆笑とともにどこかに消え去った。一命を取り留めたが尻尾が落ちた。

「もう少し勉強したらどうだ！　テストの結果は相変わらずひどい！　採点する気すら無くす」先生が男子生徒の先週のテスト結果を配り始めた。

「君たちの今の努力は将来のためになる。今から努力を積み重ねればいつかきっと実る」さっきの単調なトーンと打って変わって、先生が興奮気味な声でいつもの〝君たちの輝かしい将来〟という演説を始めた。学校が終わると親の手伝いをせざるを得ないこの学校の男子は〝輝かしい将来〟などに興味があるのだろうか。大半の職業と進路がとっくの昔に決まっているというのに。熱血教師が無駄に唾だけを飛ばしている。

「君たちの今は、白紙のように真っ白だ。良くも悪くもない。これから君たちがその白紙に色んなことを書いて、色んな色を塗って、色んな絵を描いていく。五十、六十になって、振り返って自分が描いた絵に満足ができる人生を歩むため、今からしっかりしないといけない」声のボリュームがだんだん大きくなる。再びあくびを手で隠した。歯並びのせいか、先生が興奮するといつもより、唾を遠くまで飛ばす。

「あ、今のは二列目に届いたよ。記録更新じゃない？」横の女子がこそこそ笑う。確かに先生が立っている後ろの黒板のおかげで、白い唾がどこまで飛ぶかここから良く見える。

「君たちの白い紙を悔いのない色に染めよう！」

悔いのない色とは何色だろうか。どこからが悔いのない人生の始まりなのか。大学への入学からか。人口が二万人にも満たないこの小さな町の半径十キロ内には大学の二文字も見当たらなければ、大概の子の両親も良くて、中卒。女子のケースはもっと深刻だ。学校が終わると、まっすぐ家に帰って、母親の手伝いをするか、将来の結婚の準備のために子供の服を編みだすか。成績なんて、気にする子も居なければ、気になる親もいない。

「唯一の満点が……」先生のトーンが一気に変わった。顔を窓から逸らして、男子ブロックを覗いた。満点の持ち主が気になる。

「ハサンに拍手！」先生の満足げな声に続き、男子ブロックから強い拍手と口笛が上がった。さわぎだけはいつものやる気だ。

するとクラスの反対側の真ん中辺りから、一人の細身の男子生徒が立ち上がった。

「ハサンを採点していると疲れが取れる。みんな、ハサンを見習いましょう」珍しく先生が、女子の方にもチラッとうすい視線を送った。ハサンと呼ばれた子が、無言で黒板の前まで行き、先生から採点されたテスト用紙を受け取った。首を伸ばして、彼を覗いた。茶色い髪が耳まで伸びて、細い体を包んでいるダボダボな黒いズボンが、歩くたび大きく揺れる。

ローマ彫刻の失敗作が席に帰ってゆくハサンの後ろ姿を嬉しそうに見送る。ほっぺたに少し血が上って、目が輝いている。授業をした甲斐があったというような表情だ。

お昼のチャイムが鳴った。その直後アザンの音が校内に響き渡った。お昼のお祈りが始まる合図だ。学校の真横に建てられている町唯一のモスクに設置されているスピーカーから流れる音と共に、生徒がお祈りの準備をするため、裏庭の水場に向う。

お祈りの準備としてのブズーをするため、水場の前に男子生徒の長い行列ができている。手と足を洗って清潔な身で神様との面会に挑むのだ。水場と反対側の壁の横で地面に座った。母が朝荷物に入れてくれたサンドイッチをビニール袋から出した。

水場の前で、並んでいる男子生徒が袖とズボンの裾をめくり上げ、靴下を脱いでいる。季節がいいと、ブズーも楽しい。だが、秋冬の寒い時期になると零度以下の状況で冷たい水を手足につけるのは大した修行だ。この学校では、男子生徒の昼のお祈りは強制だ。アザンの直後にお祈りをすることが一番神様に近づけるとされているからだ。ただし、時間が過ぎてからでもお祈りはできるため、女子の大半が家に帰ってからする。何しろ、髪の毛の分け目にも水をつけないといけないので、女性が普段かぶっているスカーフを取らないといけない。公の場で髪をさらせないため、男子が集まっている同じ場所でブズーができない。それでもお昼の時間にお祈りをしたい女子のため、学校の中にあるお手洗いで水が入っているバケツが用意される。手洗いの中で、スカーフなどを外していると、好奇心あふれるいたずら好きな男子が覗きにやって来る事件が度々発生する。裏庭に放置されている壊れた椅子などを積んでその上に上って、手洗いの高い窓から中を覗く。片目がやっと窓の端っこに着いた男子に気が付いた女子生徒が叫び声をあげ、慌てて顔を隠すなり、水のバケツを窓に投げつけるなりと対処法は様々だ。

興奮した男子生徒も慌てて下りて逃げようとするが、大概は廊下で隠れている監視役の先生に捕まえられ、罰を受ける。

ブズーをしに並んでいる男子生徒の列を見ながらサンドイッチを食べ始めた。いつもと同じパターンだ。まず最初に、優等生がやってくる。まじめにブズーをし、礼儀正しくお祈り部屋へと向かう。後から遅れて現れるのが、目立ちたがり屋の不良集団だ。一応ブズーをしようとするが、水を見るなり遊び心に火が付いてしまう。神様との面会に挑む集中の糸が途切れて、決まってブズーが水戦争に変わってしまう。複数のグループがひとつの蛇口にへばり付く。チョロチョロしか水が出てこない蛇口を全開にひねって、それでも勢いが足りないため、手を蛇口の下にくっつけ、そり返すと、水が狭

められ、勢いを増して飛び出てくる。指の方向を変えることで辺り一面に水を発射し、敵の集団をびしょ濡れにする。監視役の先生がやってきては、罰せられるのが一目瞭然だが、今日もまた、水戦争が始まろうとしている。

眼前に繰り広げられている水戦争の鑑賞に夢中になっていると顔に影を感じた。目の前の地面に引き伸びている影が、人の姿の形をしている。

頭を上げた。わずか五十センチぐらい前に、誰かが立っている。逆光で顔が良く見えない。顔が見えなくても頭に制服のヒジャブを被っていないのが解る。まさか……男子だろうか。

気付いていないフリをした。

影が少し動いた。帰ってくれるのか。

唾液と共にサンドイッチの最後の一口も飲み込んだ。

影が一歩近づいた。

「あ……」喋った！

思わず、横を覗いた。誰もいない。

この影、まさか喋る気じゃないだろうね。止むを得ず男女共学になっているとはいえ、男女が喋ることは禁じられている。先生に見つかれば、退学だ。

「君……の」また喋った！　明らかに私に話している。あまりの出来事の大きさに座っていた場所から飛び上がった。

私のこの行動に驚いたのか、男子生徒が一歩後ずさりし、黙り込んだ。

どうすればいいか分からず、彼をボーっと見つめた。先ほどクラスで呼ばれた、ハサンだ！

こんな優秀な生徒がこんなところで何をしているんだろう。見つかる前に逃げるべきだろうか。脳の思考が停止寸前で、行動を起こせない。ただ立ったまま後ろの壁にへばり付いて、前に立っているハサンを呆然と見つめるだけ。

ハサンも無言だ。見開いた目で私を見ている。おでこに小さな汗の粒が光っている。予想以上に背が高い。百八十近くもあるだろうか。柔らかい茶色の目の回りを女性のような長いまつ毛が囲んでいる。私のまつ毛よりも長い。

「いつ？」口が動いた。

は？　停止寸前な脳がさらに混乱した。

「父……」ハサンがつぎ足した。声が少し震えている気がする。それでも解らない。

しばらく無言が続く。

「父親はいつ帰ってくる？」途切れ途切れの聞きづらい声がやっと文を作った。

「は？」意味不明な質問に思わず、聞き返した。

「いつ？」ハサンは再び聞いた。

父親？　何の用？　呆然としてハサンを見つめていると後ろから声がした。

「ハサン！」ハサンから目を逸らした。彼のかなり後ろから先ほどの先生が立って見ていた。

きっと殺される。どうしよう。

「いつ？　いつ？」ハサンが手を振りながら急かした。

近づく後ろの先生に目を釘付けにしたまま「金曜日……」と洩らした。

するとハサンは振り向いて、逃げるように走り去った。

足を地面に引き摺りながらハサンを追いかける先生の姿を目で追う。ヒジャブの下で、一滴の汗が首筋をくだっていく。壁にへばりついたまま、腰を下ろして地面に座った。学校の裏庭で男子生徒と喋ったなんて、誰にも言えない。

なぜかマラソンを走り切ったように、息が荒い。

二

父が戦争医師として半年前、最前線に一番近い隣町の大きな病院に派遣された。続いて、私と母が三ヶ月前、首都のテヘランからこの田舎町に引っ越してきた。時々的を外した最前線のミサイルが墜落する隣町と比べ、ここは比較的安全だからだ。父の居るところはここから車で一時間半と距離的には近いが、父が帰ってくるのはこのところ一週間に一度、三日間だけだ。そのたび母が一週間分のご飯だろうかと思うほどに、テーブルいっぱいにいろんなお皿を並べて行く。

金曜日帰ってくる父を迎える買出しに、母と二人で町の市場に出かけた。市場は昔からある天井の高いトンネルのように細長い建物の中にある。今では各お店や屋台に電球が付いて比較的明るいが、昔電気がなかった時代、明るさを保つため、高い天井には所々穴を開けて、外の光を導きいれていた。今もその穴がふさがっていないため、うっかりその下を歩くと、時々鳩のフンが頭に落ちてくる。

ここは、この小さな町で唯一の食材から衣服、靴、カバン、鍋やお玉をはじめ、家庭用品が何でもそろっている市場だ。だからいつも、町中の人たちが一堂にここに集まったと思うほどに、混雑している。その混雑具合を助長させるのが、ロバに乗っているおっちゃんや猛スピードで台車を引いて人ごみを掻き分けるごついお兄ちゃんだ。掛け声に反応して、避けないと、本気で轢かれそうになる。

バザールの入口から足を一歩中に踏み入れるとあらゆる匂いが一気に迎えてくれる。スパイスの混ざり合った匂い、焼き物の香ばしい匂いから靴屋さんの合成革や魚屋さんの強烈な臭いまで。それに、雑音。客を集めようと手を叩いて大声で今日のお勧めを叫ぶお店の人、大工さんの工房で鉄をハンマーで打つ職人、母親が見つからず、大声で泣いている子供、値引きの交渉が白熱している主婦と店員、金を出さない主人に激怒する奥さん。

母は真っ先に八百屋に入った。何も言わずに山積みになっていたキュウリを手で一つ一つ確かめながら、お店のお兄ちゃんの目を窺っては、選んで袋に入れていく。終わると次はナスを詰め始めた。「ポテト詰めて！」ボーっとしているとと母に詰め専用の黄色い袋をつきつけられた。踏まれたキャベツの葉っぱが散乱している床に座っていた子供をまたいで、ポテト、オニオン、にんにくが置かれている小さなコーナーに向かった。子供が、地面に落ちていた、フニャフニャなピーマンを足に投げて来た。振り向いて睨みつけると、口を大きく開けて大声で笑った。母親は、子供をほっておいて店の反対側で、値引きの交渉に必死だ。なるべく芽が出ていない

ポテトを選んで袋に詰めはじめた。

大量の野菜袋をひじにかけて、肉屋に向かっている途中、前を歩いていたチャドル姿のぽっちゃりした女性が目に入った。赤いつっかけを地面にすりながら、体を大きく左右に揺らし、歩きづらそうに前進している。全身を包んでいる黒いチャドルの下から、部屋着の茶色いズボンの一部が見える。一歩前進する度、プラスチック製の青いカゴがチャドルの下から大きくスイングして、現れてはその中身をのぞかせてくれる。右手には、重たそうな黒いビニール袋を持っている。

両手がふさがれているのにも拘わらず、チャドルがしっかりと頭の上に固定されている。手を使わずチャドルの両側を歯で食い止めているからだ。顔からは、片方の目と鼻しか見えない。いくら急いで歩いて、走ったとしても、チャドルがずれないし、頭からすべり落ちない。両手で荷物を抱えながら、歩きづらそうでも、ボタンのないチャドルが頭に固定されている被り方の抜群さに感心していると、彼女の横を一人の男性が歩いていることに気が付いた。背の高い痩せた人だ。耳まで伸びている茶色い毛先が軽いカールを描いて、歩くたび耳元で揺れる。どこかで見覚えのある人だ。顔が見えない後ろ姿をジーっと見つめる。突然、彼が横を向いて、母親らしきチャドル姿の女性に何かを言った。

なんと、ハサンだ！

足が止まった。昼間、学校の裏庭でのことがよみがえった。私に全く気が付かないまま、ハサンがところどころ破れて、青い芽が突き出している玉ねぎのビニール袋を抱えてしゃべりながら歩いている。なぜか顔から火が燃え上がっている気がする。

「入るわよ」振り向くと、母が袖を引っ張りながら、肉屋の前に立っていた。

視界から遠くなるハサンの姿を目で追うまま、母の後ろに続いて、肉屋に入った。この辺りで唯一の自動ドアが開いた瞬間、血に混ざり合った生肉の強烈な臭いに、思わず顔が引きつった。母は臭いなどお構いなく、店のカウンターに向かった。カウンターの後ろに皮が剝かれて痩せ細った羊っぽい物体がさかさまにぶら下がっていて、お尻のお肉が半分ない。その周りを数匹のハエが楽しそうに飛んでいる。幸い頭と足首が切られて付いていないが、むき出しの光景はかなりグロテスクだ。

この町に引っ越すまで、買い物をしていた近所のスーパーでは、肉が種類とグラム数別に分けられ、綺麗にパックされていた。頭蓋骨、足や内臓などが売り場に一切なく、こんな光景を我慢することなく、買出しが楽しかった。

だが、このお店はまだましな方だ。ここに来て、最初に母とチキンを買いに行ったとき、もっと衝撃的な場面を目の当たりにしたことがある。

鶏肉を売っているお店はこの周辺に一つしかなく、それも、お店よりも鶏を飼育している民家に近い感じだった。母と二人で、売り場のような飼育部屋のようなところに入って、母が包丁を磨いていたお店のヒョロいお兄ちゃんに何グラムの鶏肉がほしいと伝えた後、お兄ちゃんが迷わずに檻の中で騒いでいたたくさんの鶏の中に手を突っ込んで、母が要求していたグラム数に一番近そうなヤツの首を掴んで檻の中から引っ張り出した。

「奥さん、活きの良い分だから、今夜の夕食にぴったり！」ニヤリとしながら、必死で体を捻って運命から逃げようとしていた鶏を宙で揺らした。まさか、夕食のおかずの最期の元気な姿を見せつけられるとは思いも寄らなかった母は、何も言えず、ただ呆然と、片手で握り締めていた鶏を揺らしながらテーブルに置いてあった包丁を掴んだ彼を見つめた。彼は、足を地面に擦りながらゆっくりとした足取りでお店の奥の青いビニールカーテンで仕切られていた場所に移動した。しばらくしていきなり鶏の大きな鳴き声が聞こえてきた。想像を膨らませたくなかったその瞬間、青いビニールカーテンの隙間から羽をばたつかせながら、必死になって走ってくる鶏の姿が現れた。小麦色の羽がほとんど真っ赤に染まって、首に頭が付いていなかった。母がその姿を見た瞬間悲鳴を上げた。鶏は数歩走ってから、いきなり止まってお店の真ん中にバタンと倒れた。信じられない光景に絶句している母を残し、手で口を押さえながら思わずお店の外に走り出た。

あの日以来、食卓に鶏肉を目にしたことがない。

母が両腕に刺青が入っていたお店のごついお兄ちゃんに挨拶をした。

「奥さん、何ぼ？」お兄ちゃんが背もたれしていたところからカウンターに近づきながら聞いた。

羊の足、頭蓋骨、脳みそ、腸、レバーがぎっしり並べられたカウンターのショウケースをちらりと覗いた。ショウケースの中であるのにも拘わらず、数匹のハエが忙しそうに内臓の上を動き回っている。

「一キロ半の羊肉と五百グラムのミンチください」

ショウケースの後ろに立ったお兄ちゃんが、分厚い腕のフサフサな毛を触りながら、「二キロの肉？　奥さんどうしたん？　敵の兵隊にでもディナーの用意か？」不快そうに爆笑した。母の返事を待たずに、厨房に置いてあった大きな包丁を汚いタオルで拭き始めた。

「こんな不幸なときに、娘の縁談話でも迎えているのかしらんけど」と言いながら、天井からぶら下がっていた逆立ちの羊のお尻辺りから、ビリッと肉の固まりを切り取った。

「この町では肉が貴重な存在や」体重計の上に投げ落としながら吐き捨てた。体重計のさび付いた針がゆっくり動き、五百三十前後で止まった。彼が指で値段を作って見せた。

やや高い気もするが、母は何も言わず、チャドルの下からカバンを取り出した。いつまで経ってもチャドルのかぶり方が旨くならない母が片手でずり落ちそうになっているチャドルを慌てて止め、もう片手で落ちそうになっていた財布を引きとめた。

母が代金を払っている間に、厨房に置いてあった肉のビニール袋を取って肉屋のドアから出て行った。

「トマト買い忘れた！」後ろに追いついてきた母が指で買った品を数えながら悔しそうに言った。

長いトンネル状の市場をちらっと覗いた。相変わらず人で

いっぱいだ。体を大きく左右に揺らしながら歩く黒チャドル姿の女性は、見当たらなかった。

三

「何か感じますか？」壁越しに父の声が聞こえてくる。
返事がない。
「ここは？」再び父の声だ。
「あ……少し」男性の弱々しい声がやっと返事した。
「ここはどうですか？」
低いソファにシーツを敷いてもっとも単純な診察道具を置いている台所前の小さな部屋の前で立っている。向かいの台所で大きなグラスに紅茶を注いでいる母の姿を覗く。珍しく頭に小さなヒジャブをかぶっている。普段家では髪を隠さない。父が帰ってくるとき、いつも近所の人が診察に訪ねてくる。そんなとき、ヒジャブをかぶっていないと患者の大半が見てはいけないものを見たかのような表情で視線を逸らし、〝アスタクフラッラー〟と神に謝りの言葉を呟きながら帰って行く。ヒジャブをかぶっていても、父を訪ねてくる男性患者のほとんどが母と目を合わさない。女性の存在を避けるようにして、診察室に入っていく。そのため母は、珍しく女性の患者がやってくるとき以外、台所で時間を潰す。
ここに引っ越ししてからは、これが金曜日の朝の光景だ。父親が診察室にこもって、母は台所に、そして私は診察室の前、手伝いの準備でスタンバイさせられる。

「うーん、これはちゃんとした大きな病院に行ってリハビリ治療をしない限り……」再び父の声だ。
男性の深いため息が聞こえた。
「長期休暇を取ったら、三つの学年が一気に休みになってしまうから、長期でここを離れることは……できない」先生の高い声が薄い壁を通して、耳をくすぐる。
「そうですか。少し歩いてみてください、そんな感じでいいです」
苦しそうな声が父のリクエストに応じた。
再び台所を覗く。母が前の患者が持ってきてくれた黒い大粒なナツメヤシの実を丸いお皿に並べている。紅茶と一緒に患者さんに出す分だ。そろそろ運ぶために呼ばれる。
「どうですか、向こうの病院は？」部屋の中から先生の声がした。
「相変わらずですよ」父が答える。
「もうすぐ、首都空爆の可能性とか、そんなの聞かないですか」先生が興味津々に聞いた。
「噂は噂ですから……、息を止めてください」父は首都空爆に関心がなさそうだ。
しゃべらずにいられない先生がしばらく無言だ、息を潜めているんだろうか。
「去年の今ごろは、来年は戦争が終わっているってみんな言ってた……いつまで続くんだろう」やっぱり先生はおしゃべりだ。
母に紅茶を運ぶように言われた。診察室に入ると、低いソファの上で座っている先生がシャツを整えていた。
「いつもの痛み止めと塗り薬を渡します」
「最近モスクでも頻繁に若者に声をかけているんですよ。戦争に出るように呼びかけている。兵隊不足が深刻ですよ。来年になっても終わらなかったら軍に入る年齢を引き下げるかもしれない、すでに十五から戦争にいけるというのに、これ以上若くなったら、もう子供でしょう。この間、一世帯に、男の子一人以上居れば、必ず一人戦争にでないといけない法案が提案されたことを知っていますか？」先生の声が興奮している。
「そうですか」関心なさそうな父の声が聞こえる。いつも冷静だ。毎日、戦時の病院で散々な姿になっている兵士達を見ているからだろうか。それとも戦争に行かされる息子がいないからだろうか。
「そうなると大変ですよ。それって、これまで四年も戦って十分長かったけど、これからも長くなるんだろうという意味なんですよ。きっと長期化する場合の兵士不足を見込んでの法案ですよ」
「でしょうね。錠剤を痛みが出たとき、飲んでください」父はいつも病院から少し痛み止めなどを持ってくる。
「本当にいつもいつも……迷惑をかけてます」先生がお礼を言いながら、薬のビニール袋を父から受け取った。
「でも……」先生が部屋から出て来た。
「しっかり勉強するんだよ」部屋の前に立っていた私に言った。
父が玄関まで見送った。帰る前、先生が振り向いて父に、「教え子の中に、一人……どうしても戦争に行かせたくない子がいるんです。勿体なさ過ぎて……自分の生徒の間に区別をするなんて……」先生がため息をついた。
「でも、八年も彼に教えているんですよ。飛びぬけてます。成績はいつもほぼ満点……本当に優秀な子だ。彼だけを……大学に行かせたいです」興奮した声で唾を飛ばし始めた。
「本人も大学に行きたいんだって、医者になりたいみたいです。彼なら、なれるはず。きっと。またいつかつれて来てもいいですか？　先生もご立派にテヘラン大学の医学部を卒業されたでしょう。彼も受かりそうな気がする。しかもこの地方、教育の支援が少ないため、推薦の枠があるんです。それに彼の父が戦争に出ているから推薦しやすい」先生の興奮が勢いを増す。
「本当は……」先生が何かを言いかけたが、なぜかやめた。
「本当は？」父が意外とこの話に興味を持っている。
「本当は、戦争に行っている父が……戦死したら……話はもっと早いんだけど」先生の声がだんだん低くなる。
「ひどい話ですけど……」先生が罪悪感に満ち溢れた声でつけ足した。
「そんなに優秀ならきっと自分の力で受かって、立派な医者になるでしょう。枠なんて要らないはず」父が玄関のドアを開けた。
「本当にありがとうございます。奥さんにお世話になってます」先生は数回父の手を握りながら玄関から出て行った。

先生が帰った後、診察室の低いソファの上に敷いてあったシーツを整えて、紅茶のグラスを片付けていると玄関のドアベルが鳴った。部屋から出ると、母が玄関のドアを開けていた。開いたドアと母の間にできていた隙間から外を覗いた。狭い路地の向いのレンガ壁にもたれ掛かっていた黒い物体が見えた。

「どうぞ、入ってください」母が素早く体を避けた。患者さんのようだ。

「ヤーアッラー！」男性の大きな声が居間中に響いた。他人の家に入る際の掛け声だ。黒い物体が重い息を吐きながら、男性にもたれたままゆっくりとドアから入ってきた。

「あっちの部屋です。どうぞ」母が素早く玄関のドアを閉め、重たそうに歩くチャドル姿の女性の脇を支えた。

「チャドル、早く！」ボーっと来客を見つめていると母に睨まれた。

入って来た大柄な女性を支えていたのは、ハサンだった。下を向いたまま、母親の脇を抱え、全く目を合わさない。

走って黒いチャドルを来客の頭からさっと取った。ザラザラするチャドルから市場の匂いがする。チャドルが取れたハサンの母親の顔を初めて見る。チャドルの下に薄茶色のかぶり物をかぶっているせいで、前髪がおでこにペタッと張り付いて、顔に大量の汗をかいていた。目を細めて、苦しそうだ。あまりハサンに似ていないと思った。

母とハサンが両脇を抱えながら、いつの間にか診察室に入った。部屋に入るなり母がドアを閉めた。

「じゃ、ベッドで横になってもらいましょうか」父の声が聞こえる。

重たい何かがゆっくり動く振動が床から伝わってくる。そして大きなものが落ちるようなズドーンという音。低いソファに乗れたようだ。

「はい、それでいい」再び父の声がした。

その直後、診察室のドアが開き、ハサンが現れた。ドアを開けた瞬間、ハサンと目があった。唇を噛んでいて、顔が少し赤い。ハサンが視線を落とし、まっすぐ玄関に向かった。何も言わず玄関のドアを開けて外に出たハサンの後ろ姿を目で追う。外に出た後ドアを閉めず、ただ閉めかけただけ。わずかに開いている隙間から、外で立っている影が見える。

診察室のドアに近づいた。

「ひざを曲げられますか？」父が診察を始めている。

しばらくすると、苦しそうなうなり声が聞こえた。すぐに父の声が聞こえた。「あ、いいいい！　もう十分だ！」ドアの前に立っていると今度は母が部屋から出てきた。何もせず、ドアの近くに立っている私を見て、

「何しているの？」

何も言わず、首を振った。

「息子さんは？」母の目が居間を一周した。

指で玄関を指した。

「外で待っているの？　長くかかるかもしれないけど」母がそういい残しながら、再び診察室に入った。

振り向いて、玄関の方を覗いた。わずか五センチほど開いていたドアの隙間から彼の影が低くなっているのがわかる。地面に座っているのだろうか。

「さ、今度は横になってみましょう」再び父の声が聞こえる。そして何かがゆっくり動く音。

「あ、ヒジャブが……」初めてハサンのお母さんの声がした。体型に似合わず、女性らしい華奢な声だ。かぶり物が頭からずれていたのだろうか。

玄関の隙間から見える低くなった影が全く動かない。

「あ、ゆっくりゆっくり」母の声がする。

診察室の前でただ立っているだけ、ストレッチした。暇だ。玄関の方に一歩近づいた。

影が全く動かない。首を伸ばして、開いていたドアの隙間から外を覗いた。

ハサンがドアの近くの壁にもたれたまま、胡坐をかいて地面に座っている。下を向いて、小さな枝で、地面の砂利に何かを書いている。

その手が止まった。私に気づいたのか。すばやく顔を逸らし、急いで玄関から離れた。

四

翌週の金曜日に、ハサンが再び母親を連れて現れた。母親を診察室のソファに乗せた後、前回と同じく玄関の外で待った。

「友達にも紅茶出してきて」母が診察室に入りながら、台所に置いてあった大きな紅茶のグラスを指で指した。

台所に入って、紅茶のグラスをお皿に乗せた。その横に角砂糖を置くべきか、ナツメヤシの実の方がいいのか少し迷った末、角砂糖一つとナツメヤシの実を二つグラスの横、お皿の上に乗せた。

玄関のドアの隙間から外を覗いた。ハサンは以前と同じポーズで地面に座っている。首の血管が浮き出ているのがこの距離からよく見える。

ドアを開けた。開いたドアに気づかなかったのか、ハサンは無反応だった。少し戸惑う。手に持っていた紅茶を見た。足を一歩、外に出した。人の気配に気づいたのか、ハサンがようやく振り向いた。

目があった。なぜか、指先が感覚を無くす。少し見開いた目で私を見つめているハサンを数秒見つめ返した。耳が熱くなる。

ハサンが何も言わずに、視線を落とした。一歩前に出て、ハサンから五十センチ離れたところで紅茶のお皿を地面に置いた。ハサンは振り向かない。下を向いたまま、両手の親指を交互に回している。指が細くて長い。女性の指のように綺麗。ドアのところに戻って、とりあえず中に入ってしまった。

台所に入って、診察室で父を手伝っている母の代わりに、シンクに置いてあったカップとお皿を洗い始めた。他にすることがない。ハサンの様子が気になる。冷蔵庫のドアを開けてみる。お昼用のパンを切ってみる。こんなにも早くから切ればきっと硬くなってしまって、母に怒られる。

気づいたら、私は玄関の前に立っていた。ハサンは紅茶を飲みきっていた。二つのナツメヤシの種が揃えられた靴のように、ぴたっとお皿の端っこに置いてあった。角砂糖は健在だった。

ハサンから一メートル離れて、地面に座った。路地の突き当たりから、夕方の赤い空が見える。まだ暖かい昼の風が吹いている。この地方の夏は長くて暑い。

大通りから人の声がする。リズミカルに何かを大声で歌っている。近づいてきた。台車を引いてパンの欠片を集めている人の声だ。一匹の猫が路地の突き当たりを注意深く横断した。もう少しすると、この辺で路上サッカーをしに、近所の男の子が集まる。

「紅茶ありがとう」突然の言葉に驚いた。何も返せなかった。しばらく無言が続く。会話にできる話題が見つからない。脳みそと格闘しているとハサンが突然、「医者ってかっこいいね」と言い出した。

振り向いた。ハサンはまだ下を向いている。父のことだろうか。小さく頷いた。

何か言いたい。だが、ロレツが回らない。しばらく無言で時間が経つ。

「お父さんは何をしている人?」この突然の勇気、どこから湧き出たのか。

「大工」

ハサンは父似だろうか。きっと背の高い優しそうな大工さんなんだろう。

「今は戦争に行っているけど」ハサンがつけ足した。

「へー」思わず、ハサンの方を見た。

ハサンは親指の爪の近くにできている水ぶくれの皮をめくり始めた。再び沈黙が続く。前のレンガの壁に大きな罅が入っている。初めて気が付いた。一列の黒アリが地面から[illegible]に向かって壁を登っている。

「もう二年も会ってない。手紙が良くくるけど。ここ最前線に近いから、あまり時間差なく手紙が届く」ハサンが再び言い出した。

「将来大工になりたい?」なんてどうでもいい質問だろう。もう少しハサンとしゃべりたい。

「違うよ!」ハサンが突然顔を上げて、私を見た。茶色い目が光っている。耳から火が吹き出た気がした。

「俺は、医者になるつもりだ!」ハサンが大きな声で言った。

まさかの答えに思わず、耳の熱さを忘れ、噴き出しそうになった。

医者か。人口二万人にも満たないこの小さな田舎町。小中高校はすべて同じ建物で、まともな病院もなければ、この国では一キロ以内にいくつものモスクが作られているのにも拘わらず、ここは小さなモスク、一つしかない。金曜日のお昼のお祈りに人がギュウギュウに座っても入れないため、モスク前の道を挟んで、反対側の地面にまでビニールのシートを敷いて、スピーカーから流れる音に合わせ、みんながお祈りをしている。たまに、軍人用の荷物や食料を運ぶトラックが道路を走ると土煙が舞い上がって、お祈りをしながら、咳き

込む人もいる。大学など半径十キロ以内にも見当たらない。医者どころか看護師も存在しない。何かの病気にかかったとしても、隣町まで行かないと医者なんか見つからない。医者になるなんて、無謀だ。

母の声がした。私を呼んでいる。こんなところで見つけられては怒られる。即立ち上がった。ドアを開けて、走って中に入った。

四度目にハサンが母親を連れて家を訪ねたとき、母が「友達を中に入れてあげて」とようやく彼を中に入れるように命じた。なぜか背中に羽が生えたような気分だ。足が浮いた感覚で玄関までほぼ走った。ハサンが向かいの壁にもたれ掛かって、ドアの隙間から中の様子を窺っているように見えた。

「母が中に入ってって」

ハサンがチラッと顔を見た。そして壁にもたれ掛かっていた背筋をピーンと伸ばした。中に入るようだ。ドアを全開にし、先に家の中に入った。

ハサンが居間に入った。椅子に座らず、廊下の入口で立っていた。紅茶を入れてあげようと台所に入った。診察室から出てきた母の声が聞こえた。

「座ってください、ちょっと時間かかるからね」

母が台所に入った。

「あ、入れてくれている?」

「じゃ、患者さんにも一つ入れて、持ってきて」

母はそういい残したまま、再び診察室に入った。

ハサンの目の前に紅茶のグラスを置いた。

「ありがとう」ハサンが顔を上げた。茶色い目が少したれている。まつ毛が私よりもずっと濃くて長い。

再び台所に戻った。コンロにこびり付いている黒いコゲに短い爪を引っ掛ける。しつこくて取れない。ハサンと話してみたい。

「ご馳走様」後ろで声がした。

振り向くと台所のドアのわきに空のグラスを持ってきたハサンが立っていた。

空のグラスを洗い始めた。ハサンはドアのわきに立ったままだ。

「母の体調がちょっと良くなっている」ハサンが最初に喋った。

「良かったね」スポンジをにぎっている指に力が入る。

「毎回薬もらって、助かっている」

「うん」頷いた。

しばらく無言が続いた。何か喋らないと居間に戻ってしまう。

「そういえば、医者になりたいんだよね」

「そう」

その会話、どう続ければいいのだろう。

「来年入学試験を受けて、政府の推薦で医学部に入学できるかもって先生が言ってくれた」ハサンが自ら話し始めた。

「へー!」思わず、振り向いてハサンを見た。

「大学に受かったら、テヘランに行く」ハサンが誇り高い表情で言った。

「ここに来るまで、テヘランに住んでたの」
「へー！　そう？」ハサンが目を大きく開いて私を見た。
小さく頷いた。会話を持たすため五回以上も洗ったグラスが手から滑り落ちそうになった。見つめられるたび、指先が感覚を失う。
「テヘランってどんな町？」
ここと大違い。真っ先に浮かんだ返事。
「テヘランはね、広くて、騒がしくて、面白い。夕方いつも渋滞するほど車も人も多い、道路も広い。ロバとか馬とかもいないし、大きなショッピングセンターやレストラン、公園も映画館もあって、遊べるところがいっぱい。南から北にかけて、綺麗な並木道が街を真っ二つに割っている。その道に立っていると北の山がよく見える。冬にはいつも雪が積もって、眺めが白くて美しい」
昔の思い出が映像のように流れて行く。テヘランに住んでいたころ、父親が近くの病院で働いていて、ここと違って、一週間に一度ではなく毎晩帰っていた。
ハサンとテヘランの話題で盛り上がった。どれぐらい時間が経ったのか、全く覚えていない。母が向かいの診察室のドアを開け、「患者さんが帰るから、ちょっと手伝って」とハサンを呼ぶまで続いた。

五

母の押入れの前で、ハンガーからぶら下がっている数枚の黒チャドルを見つめる。普段の買い物に使う地味な生地からつるつるピカピカな派手な生地まで、デザインと柄も様々だ。一番のお気に入りは結婚式やお祝いごとに使う、蝶々と花の形が刻まれている派手なデザインと、裾に薄いゴールドの刺繍が施されている上品なものだ。でも行き先はせいぜい近所のモスク。周囲のスリッパスタイルには馴染めずに、一人だけ目立つ。派手なものなどとても被れない。
そんなことを考えながら、柄のある生地に手が伸びる。指先に少し触れた。やっぱり高い生地は違う。欲が出る。こんなの被れば、きっと目立つ。生地の抜群の肌触りに指先が脳される。
突然母の顔が思い浮かんだ。ばれたら、怒られる。
やっぱりやめよう。下から二番目に地味なチャドルをハンガーから引っ張りおろした。
「モスク行ってくる」台所で食器を洗っている母の後ろ姿を覗きながら玄関に向かった。
「モスク？」台所のドアのわきから顔を出して、母が濡れた手をタオルで拭いている。
「うん……」母の疑わしい視線を避けるため、カバンの中のチャドルを丸める。
「どうして、モスク？」母がなぜか生まれて初めて耳にしたかのように〝モスク〟を発音する。
「ラマダンが始まっているから、学校のみんなも行っているから、私も行ってみたい」ムスリムの家庭に飛び出た愚問に適当な嘘をついてみる。

母が呆然とした表情で私を見つめている。〝この子いつから熱心なムスリムになったのかしら〟そんな疑問が母の頭を過ぎっているのが、目に見える。母は知っている、私が一日五回のお祈りもしていないことを。ここに引っ越すまでラマダンでほとんど断食をしたこともなかった。モスクには行ったことがあるがそれは、千年も前から残されている世界遺産の見学のときのみだった。ここに引っ越すまで住んでいたテヘランの環境は、比較的ルーズだった。通っていた学校にもムスリム以外の宗教を持つ人も居たため、昼のお祈りが強制ではなかった。ここと違って、毎朝三十分コーランの一節を唱和する習慣なども、全くなかった。
だが、イラクとの国境まで車で二時間もしないこの小さな田舎町には信者が多い。首都で楽している人と違って、半数の男性が〝神のため国のため〟という台詞を心の底から叫びながら一番最初に戦争に出て行った。女性の九割がチャドルを被っていて、顔がほとんど見えないように厳しく隠している。テヘランの街角と違って、手を繋いで町を歩いている若い男女が見当たらない。明らかに結婚しているもの同士でさえ、町を歩いているとき、間に一メートルの距離を置く。
〝娘は風土を吸収して、周囲に溶け込もうとしている〟、そんな解説が母の頭を過ぎったのか、少し離れていたパーツが元に戻った。
「いいわよ。あまり遅くならないようにね」緩む口元をどうにか押さえたい。顔を落とす。
「終わったらすぐに戻ってくる」何が終わるのか？　何しにモスクに行こうとしているかすら、分かっていない。
母のコメントを聞く前に、玄関のドアを開けて、外に飛び出た。外は夕焼けの濃い赤一色に染まっている。ドアの前で、しわくちゃになっていたチャドルをカバンから取り出して、羽織った。ゴムを耳の後ろに固定しても頭の上に落ち着かず、すべり落ちる。毎回出かけるとき、チャドルと格闘する母の気持ちが初めて分かる。チャドルが道の泥に引っかからないように丈を集めて、片手にかけた。
小走りで大道に出た。なぜか、緊張する。通りは比較的空いている。ラマダン期間中の日暮れ前のこの時間帯だと、町が空っぽになる。野良猫でさえ、行きつけの玄関の前で指先を舐めながらスタンバイしている。誰もが、家に戻って、テーブルに豪華な食事を並べて、一日中ずっと我慢した香ばしい料理の匂いも香りも肺いっぱいに吸い込みながら、断食を終わらす瞬間を待つ。
しばらく歩くとパン屋さんの前に着いた。ここだけ、大繁盛だ。イフタリと呼ばれる一日の断食を終える食事に添えるパンを買おうと長い行列ができている。ハサンはパン屋さんの近くで待っていると言っていたが、こんなところでハサンと出くわしたくない。
パン屋さんを通り越してしばらく歩いた。ハサンの姿が見当たらない。日がほとんど沈んで空が一気に暗くなった。周りを見渡した。ハサンらしき人はいない。
ここでしばらく待つべきだろうか。夕方に道端で女性一人が男を待つというとんでもない行動に出る勇気はない。帰る

べきだろうか。家を出て十五分で戻るとはどういうことだ？ 母に質問攻めにされる。帰る勇気もない。ハサンなしでモスクに行ってみるべきだろうか？　一人で一度も行ったことのないような場所に行くのが、すこし怖い。再び周りを見渡す。どうして居ないんだろう。もう帰ったのか？　確か私は遅れていないはずだ。先ほどアザンが終わったばっかりだ。足取りが少しふらつく。母の顔を思い出す。ペースを落としていた足が完全に止まってしまった。前に誰もいない。振り返って後ろをみた。細いチャドル姿の女性がプラスチックの青い買い物カゴに大量のパンを詰め込んで早歩きで近づいてくる。まさか、女装しているのか。そんな訳があるはずが……。確かに戦争が始まった当初、女装をして国境から逃げた男性が多く居たという話を聞いたことがある。チャドルなら顔を完全に隠せるため、細く小さい男であれば、なりきれなくもないが。

パンが突き出ている買い物カゴを揺らしながら女性が近づいた。心臓の音が喉から聞こえてくる。前へ歩き去った。私よりも背が低い。完全に女性だった。

肩を落とした。チャドル姿でも、ハサンだと疑いたくなる自分に少し腹が立つ。

ボロいバイクが大量の真っ黒の排気ガスを宙に放ちながら前を通った。乗っていたお兄ちゃんがこっちを見ながら、歩道で佇んでいる私に長い口笛を吹いた。

恥ずかしい。

もう帰ろう。伸びていたチャドルの丈を直し始めた。そのとき、前の壁から大きな影が離れた。影が、さりげなく手を振った。目を細くした。ハサンだ！

手に集めていたチャドルの丈を一気に離した。足が勝手に動き出す。大きく開いている口を隠すため、手でチャドルを鼻の前に握り止めた。

ハサンは待たずに先を歩き始めた。さすがに、こんな公の場で話すことはできない。

三メートルほどハサンの後ろを追って十分、ようやくモスクの大きな建物が姿を現した。丸い大きなドームの横に伸びている二つのメナラーの先端のライトが光る。各メナラーに設置されたスピーカーからコーランが流れている。モスク前の広場に数名の黒シャツの男性が立っている。さらに近づくと、イフタリの匂いで迎えられた。辺り一面に充満している炒め過ぎた玉ねぎとトマトの匂いが焦がした砂糖と油の匂いと混ざり合って、食欲を誘う。モスクではラマダンの期間中、毎晩お祈りの後、イフタリが配られる。たいがいはモスク関係者が作っている食事だ。それに加え、ほとんど毎日近くの住民が以前神様にお願い事をして、それが叶った感謝の気持ちとしてデザートのようなハルワを作ってみんなに配る。

モスクのありきたりのイフタリはいいとして、一口五百キロカロリーもあるんじゃないかというほどに重くて、甘くて、おいしいハルワの匂いで気を失ってしまいそうだ。小麦を香ばしくなるまでバターで炒め、茶色くなったら、水で溶いた砂糖、薔薇のエキスとほかの調味料を加え、固まるまで混ぜながら炒める。程よく固まったら、それを平らな皿に移して、冷やす。冷えたら指でハルワの表面に色んな形を作る。年に数回しか食べる機会がないだけにハルワは本当に美味しい。

ハルワ以外にもナツメヤシの実も配られる。センスのいい人だと、中の種を抜いて、開いた穴に贅沢にくるみを挟んでくれる。柔らかいナツメヤシの実の食感と硬いくるみが口の中で絶妙なバランスを生み出す。さらにそのねっちりした甘さをくるみが和らげてくれる。想像しながらいつの間にか口いっぱいの唾液を飲み込んでいると前を歩いていたハサンがモスクの入口に着いた。入口の大きなライトの明かりでようやくハサンの顔が見えた。茶色い髪が少し乱れて、おでこの半分を隠している。薄緑のシャツにいつもの黒いズボンを穿いている。ハサンがモスクの入口の前で靴を脱ぎ始めた。続いて私もその後ろで靴を脱ごうとした。しゃがんだ瞬間、横から黒シャツのお兄ちゃんに突然「なにしてるんだ！　女性の入口は回って、裏だよ！」大きな声で注意された。ハサンを追いかけて、思わずうっかりしてしまった。慌てて半分脱いでいた靴に足を突っ込んで、「ごめんなさい」と謝りながら走ってモスクの裏に回った。女性専用の入口の前にも同じく数名のチャドル姿の女性が立っていた。

靴を脱いで、渡されたビニール袋に入れた。男性の入口に比べ、かなり狭い入口から中に入った。入ると二階へと繋がる階段があった。階段に敷かれてあった古いカーペットに所々残されていた昔赤色だった痕跡を踏みながら二階に着いた。二階の女性フロアは下のフロアを囲ってバルコニー状になっていた。下の男性フロアとその前に座って演説をしていたモッラが見えるような作りだ。

ところ狭しと座っていた男性フロアと比べ、女性のベランダは比較的空いていた。ベランダに一番近い場所を求め、移動し始めた。それと同時に下を見ながら、座っていた男性の間からハサンを探した。

見当たらない。ひとまず、観察によさそうな場所を見つけた。手で青い数珠を回しながら、何かを呟いている大柄な女性の横のスペースに身を縮ませ座った。周りの女性は、下を見つめたり、コーランを読んだりして、みんな真剣だ。

目を回らして女性を見ているとベランダの端っこに、チャドルの前を開けた若い女性が一人座っていた。かなり濃い化粧をして、胸元が大きく開いた赤い服を着ている。かなり派手だ。下のフロアに熱い目線を送っている。まさか狙いは、長いひげを触りながら数珠を回して、イスラムについて熱く語っているモッラではないだろうか。

再び目でハサンを探した。ここから見る一階の地面に正座している男性の頭部と体の隙間から機械織りのカーペットの大きな花しか見えない。真ん中の固まりは、髪が多少白くなったり少なくなったりしている人たちばかりで、その周りを真っ黒な元気な髪の人が囲っている。真ん中のいい席が、言わずと知れた優先席なのだろうか。

お祈りがすでに終わっている。みんなの前の特等席に座っているぽっちゃりしたひげの長いモッラがラマダンについて喋っている。下を向きながら頷く人が大半だ。数珠を回しながらお祈りの後に神様にささげる言葉を呟いている人もちら

ほらいる。
「ラマダンはご飯が食べられない貧しい人たちの気持ちを理解するための一ヶ月です。一日中何も口にしない、水も飲まない、食料が目の前にあったとしても我慢することが、どれだけ大変なのか。それを身を以って実感するという大切な期間だ。この期間に人間が一番神様に近づけると言われている。この厳しい試練を見事に通過できた人に神様からご褒美が与えられる。良いことが何十倍にもなって記録され、同じく悪いことも何十倍かにされてしまう、とっても大切な期間なのだ」
モッラが〝イスラム教〟の教科書に載っている文章と似たような台詞をハキハキとした声で宙に放つと、優先座席の後頭部が一斉に上下に動いて、頷く。
目を回らして、再びハサンを探した。二階から一階に繋がっている四つの柱の横の人たちが、座る場所が十分でないため、立っている。
右柱の後ろに半分隠れている若い男性が、目に入った。モスクに居るのにも拘わらず、お構いなしの熱い視線が二階に釘付けだ。その視線を追った。二階のベランダの端っこに座っているあの化粧の濃い女性に繋がった。
モッラの注意深い演説と裏腹に、男性が二階を見つめながら、口を動かした。すごい度胸だ。端っこの女性が意味深く小さく微笑んだ。そして暑いふりをしながら、チャドルを数回すばやく開け閉めした。チラチラ見える大きく開いた胸元がとってもセクシーだ。

首を伸ばして、さらに下を探す。入口近辺に、やっと立っているハサンを見つけた。まっすぐ立って、まじめに演説を聴いている。
一時間近くにも及んだ演説の途中に、イフタリの食事が配られた。ご飯とその上にお肉とトマトの煮込みにフライドポテトを加えたゲイメという料理が乗っている平らなプラスチック皿があの手この手から回ってきた。締めにハルワと紅茶も配られた。
目玉の食事とおまけの演説も終盤に近づき、少しずつ人が帰り始めた。一階の入口近辺に立っていたハサンが外に出たのを見て、座っていた場所から立ち上がった。長い階段を下りて、外に出たとき、辺りがすっかり暗くなっていた。ハサンが混雑している男性入口から少し離れた暗い場所で待っていた。ビニール袋に詰めていた靴を履いた。
ハサンが立っているところに向かった。近づくとハサンが何も言わずに先を歩き出した。
パン屋の近くに着いたとき、ハサンが止まった。辺りは真っ暗だ。しばらく下を向いたまま、無言だった。
「ラマダン中、ほぼ毎晩モスクに行くけど」ハサンがチラッとこっちを覗いた。
頷いた。耳が熱い。
「また気が向いたら……」ハサンが下を向いたまま、小さな路地に入っていった。
週二、三回ならまだしも毎日は母に嘘をつけない。

六

モスクに続く道は相変わらず、空いている。五十センチほど前を、ハサンが歩いている。耳下まで伸びている茶色い髪の軽いカールが歩くたび揺れる。首筋に沿って浮き出ている血管が髪の下で視界から消える。ダボダボな黒いズボンの横に伸びている指が細くて長い。時々振り向いてくれる。振り向くといつも表情が面白い。片方の眉毛は上がって、口元が下に緩んで、無意識に、笑ってしまう。するとハサンがすぐに顔を逸らして、歩く速度を増す。
今週モスクにいくのは、これが三回目だ。来週ラマダンが終わる。ラマダンが終われば、もう夕方モスクでは、イフタリが配られない。
ハサンが再び振り向いた。何か言いたそうだ。少し歩く幅を大きくした。間の距離が、三十センチぐらいになった。
「大学の入学試験、受けようと思っている」
顔を上げ、ハサンを見た。
「成績は基準をクリアしているし、受けたら、合格する可能性があるって。先生に言われた」ハサンが珍しく少し興奮気味なトーンで話している。
「もうすぐ受験の申し込みの締め切りだ。試験に受かったら、面接もあるみたい。父が戦争に出ているから俺は戦争に参加する義務はないし、合格したら入学すると思う」
「良かったね」

「うん……母は一人になるけど」ハサンが首を小さく振った。
頷いた。
「それと……」ハサンが振り向いて、一瞬顔を見てくれた。
「何？」なぜか、ドキドキする。
「罪悪感が……」話が思ったのと違う方向に。
「どうして？」
「クラスの九割が卒業したら、戦争に出るから。大学に行くのは俺だけだと思う……」
ボロいバイクが横を通った。そして、長い口笛。チャドルで顔を隠す。歩く幅を縮ませた。
角を曲がるとモスクのメナラーの先端が現れた。もう少しすると各メナラーに設置されている巨大なスピーカーからコーランが放送される。
「戦争が終わったら、私たちもまたテヘランに戻る」母は今からでも戻りたくてしょうがない。
「早く終わるといいけど」ハサンがため息をついた。
再び頷く。
「父に早く戻ってきてほしい。俺が大学に行く前に」
モスクに近づく。ハサンが歩く速度を、少し落とした。
突然、町中にサイレンの音が鳴り響いた。足が止まった。隣町のサイレンの音をたまに聞くけど、ここでサイレンが鳴るのは珍しいことだ。立っているとハサンが横に来た。
「何かの間違い？」
振り向いて、周囲を見る。歩道を歩く人たちの大半が立ち止まって、なぜか空を見上げている。

「あっち！　あっち！」誰かの叫び声が聞こえる。みんなが向いている方を向いた。民家の間に、夕方の日が沈む直前の赤い空以外、何も見当たらない。
「何か見える？」ハサンに聞いた。
ハサンは無言だ。
「いつもと同じじゃない？」再び聞く。
「日が……十五分前に沈んだよ」ハサンが呟いた。
ハサンの言葉が宙に放たれ、脳に理解される前に、強い衝撃と共に地面に投げ飛ばされた。そして、凄まじいガラスの割れる音。本能的に体を丸め、手で頭を隠した。数秒後、二度目の強い衝撃、人の長い叫び声、地面に落ちる重たい何か。目を強く閉じて、恐怖のあまり息が止まった。再び人の叫び声。そして、数秒の無言。
「大丈夫？　大丈夫？」ハサンの声だ。目を開けた。前にハサンがしゃがんでいる。土煙のような霧に囲まれた顔が、近い。
唾液を飲み込む。何があったのか。
「早く、避難所へ行こう」ハサンが手を引っ張りながら立ち上がった。初めて手にふれた。
「避難所？」そんな場所がどこにあるのか？
道路一面、ガラスの破片で埋め尽くされている。人が土煙に包まれながら、歩道に倒れている。ハサンに引っ張られるままに走り出した。路上に座って、両手を挙げ、頭を叩いて叫ぶ女性、激しく泣く子供、真っ白な顔で横を走っている私たちを目で追う中年の男性、映画のワンシーンのように過ぎていく。すべてが土埃っぽい。
「何があったの？」
「空爆だ！」
「は？」まさかの答えに思わず走る足が止まった。
「早く！」ハサンが手を強く引っ張った。ほそ長い指が強い。無意識に親指を手の甲になぞった。再び走り出す。この小さな町、戦争から四年も経っているのに、空爆なんて一度もなかったのに。ハサンが全力で走っている。追いつかない。引っ張られる手が痛む。
「ここじゃない、もう少し離れている」ハサンが早口だ。
「何が？」
「落ちた場所が」ハサンが走りながら、口を大きく開け、空気を吸い込んだ。「でも次はここかもしれないから、早く逃げないと」急かされた。
息が切れそうだ。
モスクの近くに着くとハサンの走りが早歩きに変わった。モスクの前は、人でかなり混雑していた。珍しく男女が入り混じって、全員一斉に大声で喋っている、中に泣きながら叫ぶ人も。入口前に着くとモスクのお兄さんが「下、階段、早く！」大声で急かした。
靴など脱がずに続いて、ハサンの後ろ、入口の横にあった階段を下り始めた。階段を下りている途中、後ろの人が背中を手で押す。何度か転びそうになった。階段が暗くて、先が全然見えない。長い暗い階段を下りると辺りが少し明るくなった。強烈な湿気の臭いがする比較的広いスペースを低い天井からぶら下がっている小さい電球が明るくしていた。前を向くと数十の目が私たちが下りた階段の入口に釘付けになっていた。集まっている人たちが異常な静かさで階段を見つめていた。
「上はどうなっているの？」突然誰か、大きな声で聞いた。
「あの二発の後に、もうなかった」ハサンが答えた。
「誰か死んでる？」別の女性が涙声で聞いた。
「見た限り……大丈夫でした」ハサンが答えた後、あちこちからたくさんの質問がさびたヤリのように投げ飛ばされた。人ごみを掻き分け、前に進もうとしていると、誰かハサンの袖を引っ張って「学校の反対側の建物、壊れてなかった？」ハサンが答える前に痩せ細ったおばさんが横から割り込んだ。「もう終わったの？」ハサンが答えようとすると今度は大柄な男性がひじで自分用のスペースを開けて「市場は？」と聞いてきた。
「たぶん……大丈夫」ハサンが答える。二歩進むとまた別の人が「外はどうなっているの？　燃え上がっているの？」次々とあちらこちらから質問が飛び出す。この薄暗い空間に閉じ込められている人たちの顔が無知の恐怖で怯えている。外の情報が一切届かず、新しく入ってくる人を囲んで、質問攻めにしては、何か明るいニュースを求めている。
入口前の狭い空間が一気に騒がしくなった。集まっている何百人もの人達が一斉に喋っている。子供の泣き声が絶えない。女性の大半が泣きながら、手で頭を叩く。この辺りで不幸が起きるとよく見かける光景だ。ハサンに引っ張られるまま、部屋の奥に移動した。
「しばらくここで待とう」ハサンが地面に座った。意外と冷静だ。
壁の前、戦場の基地作りで使われている、土を詰めた白いプラスチック袋が地面から天井までぎっしり積まれている。避難所の壁の強度を増すためだろうか。地面に座って、土袋にもたれた。湿気の強烈な臭いをさらに強く感じる。壁の後ろを通る水道パイプに穴でも開いているのか。
横の奥さんが寝ている子供を抱えたまま、両目をチャドルで押さえ、無言で泣いている。母を思い出す。どこで何をしているんだろう。きっと心配している。
「母が……」
「外のサイレンが止むまでここに居た方がいい。止んだらすぐに帰ろう」ハサンが手を肩に置いた。手が暖かい。
階段からまた新しい人が下りて来る。下に着くと、階段の前に集まっている人達に囲まれ、質問攻めにされる。ここに閉じこもっていると外の世界から一切の情報が入ってこない。人で溢れているこの薄暗い空間は、ある意味怖い。地面から何十メートルも下にある、外の世界から切り離された空間。もし入口にミサイルが落ちたら、助かる可能性はゼロ以下だ。何百人も一緒に、窒息してしまう。
「旦那はトラックの運転手なの、今朝荷物を届けに隣町に行ったんだけど……」前に座っていた奥さんが、突然振り向いた。真っ赤な目が恐ろしい恐怖を訴えた。
「うちも隣町の電力会社で働いている。よく電信柱に登って

……週末帰ってくるって言ってたのに」ひどくかすれている声だ。

その横に座っている奥さんが、膝に眠っていた八歳ぐらいの女の子の鼻をチャドルでつまみながら「うちのは、先週最前線に行ったばかりなの。この子ずっとお父さんのことを聞いてくるんだけど、戦争に行ってることなんか、怖くてまだ言ってない……次いつ会えることやら……」彼女は娘の顔を強く抱きしめて泣き始めた。

その横の奥さんが「父も兄も最前線に行っているわ、半年も前からもう手紙が来ていない……」分厚いザラザラした手の表面を擦りながら言った。「来月兄の奥さんが子供を生むんだけど、何回も手紙を書いてて……返事がなくて、兄の奥さんに、絶対子供の顔を見に帰ってくるって嘘ついちゃって……」深いため息をついた。

「みんな、聞いてくれ！」突然大きな声が空間に響いた。

突然の呼び声に、ざわめきが少し収まった。前を見ると、一人の男性が、階段の前に積まれていた二つの木製箱の上に上っていた。この距離からだと顔がはっきり見えない。濃いヒゲとおでこに巻いている鉢巻だけが、目立つ。

「お母さん、あなたの息子がこの国を支えている！」男性の粘り強い声が、部屋の奥に座っている私たちのところまではっきり届く。

「この若い力が、我々を敵から守ってくれる。あなたの息子が、あなたが生んだその英雄がこの国に新しい命を注いでくれる」

気のせいか、演説をしている本人が十分若く見える。三十代前半だろうか。濃いヒゲがなければ、もう少し若くも。

「兵士が足りない！」鉢巻の男性が突然声をさらに上げた。周囲は無言だ。男性が輝く真っ黒な瞳を人ごみの中に回らした。静まり返った空間のどこからか水滴が落ちる音が聞こえる。

「我々はこのつきつけられた不公平な戦争に勝たなければいけない！　これまで流された血を挽回しなければいけない」男性が叫びながらコブシを上げ、薄暗い宙に振った。

「今までボランティアや年齢制限など色々あったけど、これからは年齢など関係なく、国を救いたいその勇者の魂を持つ人は、何歳でも、戦争に行ける時代だ」

「我々は勝つ！　神がいるから。この若い力のおかげで、勝つ！」

この薄暗い空間の中で、絶望に満ちている人たちを前に、粘り強い声で強い言葉を吐く男性が救世主に見える。その言葉、その強い姿勢で今一番必要としている希望を体内に注入してくれる。

「私の後に……我々が勝つ！」彼が声を上げ、もっとも強い声で繰り返した。その直後あちらこちらから、拍手の音。

「我々が勝つ！」彼がもう一度叫んだ。何人かは「そうだ！我々が勝つ！」大声で叫んだ。

「神が我々を応援している！」

男性の叫び声の後、何百人もの人が一斉に叫んだ。声が骨の芯まで届く気がした。強くて、ぶっとい。

「もっと高く、もっと強く、この声が敵まで届くように」男性がさらに大きな声で叫んだ。「この血をささげる、神に、国に！」再び叫んだ。周囲が、大きな声で繰り返した。すごい響きだ。背もたれしている後ろの土袋が声の振動に、震える。男性が止めずに叫ぶ。コブシを宙に振りながら。地面に座っている人たちがちらほら立ち上がった。

「我々が勝つ！　神が見守っている」男性が叫ぶ。周囲が繰り返す。声の響きで地面すら震える気がした。この一斉の声が、ミサイルすら打ち返せる力さえあると一瞬思った。もう怖くない。強い熱い何かに包まれた気分だ。気が付くと私とハサンも手を上げ、みんなと叫んでいた。

「敵なんてぶっ潰す！」鉢巻のお兄ちゃんが興奮のあまりに片手に持っていた銃を宙で回した。続いて全員一斉に繰り返した。

「神がここに居る！」叫び声がだんだん強くなる。先（さつき）まで、ちらほらと立ったり座ったりしていた人たちが、全員立ち上がっている。コブシを強く振りながら、繰り返す。お兄さんが血管が浮き出ている真っ赤な顔で熱いフレーズを連発する。前に居る何百人ものコブシが一斉に振られる。

先ほどまでの不安と迷いが、みんなの顔から消えている。目が輝いて、表情が強そうだ。敵なんて怖くない。強い。熱い。体中の血管に流れている血が騒ぎ出しているのを感じる。

「この紙に名前を書いた人が神に会える喜びと幸を迎える」鉢巻のお兄さんが今度は白い紙を宙に回した。

「兵士として、名前を登録するリストだ。さー、勇者よ。国のため、神のため」人ごみが動き始めた。中にいた男性が名前を書きに一斉に前に出た。指先が燃えている。心臓の音が喉から聞こえる。女でなかったら紙に名前を書いていた。横を覗いた。この手からあの手に回される紙を、ハサンが唇を噛んだまま、見つめている。

七

サイレンが一週間、頻繁に鳴り続けた。一度鳴り出すと止むまで、家に居れば地下に逃げ込む、外に居れば避難所に走る、選択肢が二つしかない。一緒にモスク地下の避難所に行ったとき以来、ハサンに会ってない。母が恐怖のあまり、外に一歩も足を踏み出させてくれない。

父から時々電話が来る。戦争病院は空爆の的から外されているようだ。それでも隣町の空爆が続いている。隣町に続く、ほぼすべての道路が爆弾でダメージを受けて、通行止めになっている状態だ。

八日目に、ようやくサイレンが止んだ。その日の午後、母と二人でしばらくの間の食料を買いに家を出た。家の路地から大通りに出ると、母は歩く代わりに走りだした。外に居るのが恐いようだ。一週間ぶりに見る町は、以前よりもがらんとしている。近くにミサイルなど落ちた痕跡はない。だが、衝撃でほとんどの建物の窓ガラスが割れている。大概のお店が閉まっている。パン屋の前だけ、チャドル姿の女性数名が並んでいる。いつもの大繁盛の欠片もない。路上で放置され

ている車の数がずいぶん増えている。決まって四輪に、貴重なタイヤがない。

母が手を引っ張る。モスクの前を通り過ぎた。入口の前に、濃い緑のミニバスが駐車している。ミニバスの横の、引っくり返った木製の果物箱の上に一人の体格の良い男性が上っていた。よく見ると鉢巻をしていて、濃いヒゲが顔の半分を隠している。あの日、モスクの地下で演説をした人だ。今日もきっと熱く呼びかけるだろう。もう一度聞きたい。足元が少し緩んだ瞬間、母に強く引っ張られた。演説を聴くチャンスは与えられないまま、市場に向かった。

十日目には、学校に行ってもいいと母が言ってくれた。十日ぶり、ハサンに会える。翌朝、学校の前に着くと、数十名の生徒と親が閉まっている門の前で集まっていた。閉じている門の前に、張り紙が張り出されていた。

〝緊急事態のため、次の知らせがあるまで休校とする〟

学校が休校になっていた。白い紙の真ん中に、この文以外に、何もなかった。再開する時期など書かれておらず、右下には校長の弱々しいサインだけがあった。紙を見つめながら、門の前で立つ。八十過ぎの見張り役のおじいさんがいつも座っている鉄パイプの椅子の上に上って、井戸の中から出てくるような、全く聞こえない声で、みんなに解散するように呼びかけていた。話の途中に咳込んで、曲がっている腰がより低くなって、視界から消えたり、再びまっすぐに立つと現れたりする。

門の前に集まっている人ごみの中を目で探す。ハサンがいない。

最後に見た彼の顔を思い出す。モスクの地下で、あの白い紙を見つめていた眼差しが頭に浮かんだ。その後、何度かモスクの入口の前に止まっていたミニバスを見かけたことを思い出した。まさか……その後名、前を……なぜか、背筋が震えた。

人ごみの中から出てきた。少し離れたところで立っている先生が目に飛び込んだ。

「学校はいつ再開しますか?」学校の壁にもたれ掛かっていた先生に聞いた。

「空爆が終わるまで、来週か再来週ぐらいじゃないか」先生がさらっと流した。

「空爆がいつ終わるなんて、誰も分からないじゃない?」後ろの奥さんが割り込んだ。

「この広い国の地図に肉も脂も付いているまともな的が山ほどある。南部の油田、中部の電力、大統領の家、おまけに半数がイラクとの国境の近くだし、牛や羊も計算に入れても人口が二万人にも満たないこの町にはミサイルを落としたら勿体無いってイラキの軍が百も承知だ!」

心臓に抜群に効く答えを聞いた奥さんが再び門の前に戻った。

先生の前に立って、あの質問をして良いかどうか、迷う。

先生なら知っているはず。

勇気を振り絞った。

「今日、来てないですね」喉が渇く。

「誰が?」

「ハ……ハサンが……」唾液を飲み込んだ。

先生は片眉を素早く上げ、私を覗いた。女子が関係のない男子の行方を聞くとは、大した度胸だ。先生が数秒何も言わずに、私を見つめた。

「昨日からイスファハンに行っている」

「え?」どうしてイスファハンに行ったかを驚くよりも、素直に答えた先生に驚いた。

「受験しに行っている。隣町の空爆のため、この周辺のポストが全部止まっているから、近辺の受験センターが全部中部周辺に振り分けられている」

もうそんな時期だったのか。なぜかほっとする。

「受かるといいですね」

「彼なら実力で受かる。万が一受からなかったら父が戦争兵だから、推薦でも通ると思うし。まあ、立派な医者になるといい」

もうしばらくしたら、ハサンはテヘランに引っ越すだろう。門を覗いた。次々とやってくる生徒と母親が、咳込まずに居られないおじいさんに同じ質問を投げつけている。

「おじいさん一人で、大変だ」先生は足を地面に引き摺りながら、門のところに向かった。

帰り、モスクの前を通るといつも駐車していたミニバスがなく、その代わりに大きなトラックが駐車していた。トラックの後ろに、ヒゲが生えたての若者数名が列を作って立っていた。頭に鉢巻を巻いて、全員兵士が着る濃い緑の制服を着ていた。彼らを数名のチャドル姿の女性が囲んで、誰か大声でコーランを読んでいた。それぞれの首に大きな花の輪が飾られ、お母さんらしきチャドル姿の女性たちの手には大きなコーランが目立つ。立ち止まった。リーダーらしき人が、トラックに乗った。すると男性の列が動き出した。チャドル姿の女性たちがトラックに乗ろうとしている息子を抱きしめ、泣きだした。公の場で、唯一許される男女の抱き合いは、母と息子だ。戦争に向う息子を強く抱きしめる母の姿が痛ましい。視線を逸らして、モスクの前を通り過ぎた。

三日後、イラクの軍が国境を越え、侵入してきた。サイレンが再び鳴り出した。今度は、的を外したミサイルが頻繁に近くに落ちてくるようになった。そして、予想されていた最悪の状況、テヘランへの空爆が秒読みとなった。テヘランに住んでいた親の親戚や知り合いが安全と言われていた山に囲まれている地方に逃げ、できる人は海外に逃げ始めた。空爆の可能性を受け、政府は緊急事態を発表した。首都の学校と大学がすべて休校になった。

八

サイレンが止んで三週間経っても学校は再開せず、戦争が収まる気配は全くない。ラマダンが過ぎて、次はモハラムが来た。モハラムという月はイスラム教のシーア派の信者にとってはとても大切な月だ。イスラムの歴史ではモハラムの最後に、長く厳しい戦争の末、ムハンマドの孫であるホセイン

が殺害される。そのため、モハラムの期間中に、その戦いを演じたダステと呼ばれる劇団が町中を動き回って、歌を歌いながら、戦いのあらゆるシーンを演じる。大きな町に行くと、このダステで毎年、決まった役を演じるプロがいる。終盤はもちろん、戦争が行われたその歴史的な日に行われる。この町でもダステがある。以前まで、町のたくましいお兄ちゃんたちが黒いシャツを着て、二列になりながら小さな鎖で軽く肩や胸を叩きながら、歌を歌って、町を歩いていた。その中でも、肉体に自信のある人がアラムと呼ばれる鉄でできた大きな飾りを肩に乗せて、同しながらダステの中央を歩く。今年は町からたくましいお兄ちゃんという言葉が一気に消されたように、女性、子供と年寄り以外には見当たらない。最近の呼びかけに応じて、大半の若者が戦争に出ている。その代わりに、学校が休みになったことで、暇を持て余している子供達がダステを作り始めている。アラムは重すぎて、危ないため、今年身長が二十センチも縮んだダステには見所のアラムがない。さらに、いつも白い馬に乗って登場するホセイン役とその敵のヤジード役は今年、ボロい台車に乗って登場した十二、三歳の男の子だった。

モハラムの期間中、誰も断食をしないため、モスクではイフタリが配られない。だが、モスクの前を通るたび、町中の誰かが大きな鍋を置いて、家で作った温かいスープをみんなに配っている。時々甘い飲み物を配る人もいる。

なぜか、このごろ夕方になると、モスクの前を歩きまわる。学校が休みになってから、暇だ。ある夕方、モスクの前で配られているスープを飲んでいると、近くに人の気配がした。振り向くと横にハサンが立っていた。驚きのあまりに、持っていたスープの器を落としそうになった。

「昨日帰ってきた」ハサンは人の目を気にして、あまり顔を見てくれない。

「受験したの？」

ハサンが小さく頷いた。

「どうだった？」

ハサンは顔を上げ、私を覗いた。眼が光っている。その表情を見て無意識に口元がゆるんだ。ハサンが笑った。

「もちろんまだ、分からないよ。結果の連絡が学校に行く」

「良かったね」

再び頷いた。

ポケットから掌半分ほどの四角い箱を出した。

「手出して」

手を出すと、その箱を掌に載せてくれた。白い箱の上に、昔の絵が描かれている。イスファハンの有名な広場の前に作られた、お城のバルコニーから王様が広場で繰り広げられているゲームを鑑賞している絵だ。

「綺麗！」

「お土産だ。ラクダの骨からできているよ」

「本当に？」緩む口元を押さえるため顔を落とした。絵を指でなぞった。滑らかな質感だ。

「しかも父から手紙が来ている、来月帰ってくる！」ハサンは嬉しそうに言った。

「良かったね」

「俺もスープもらおう」ハサンが言いながら、スープの列に並びに行った。

顔を上げ、列に並んでいるハサンを見た。今日は珍しく髪が耳の前まで縮んでいる。イスファハンで切ったのか。髪が短くなったため、浮き出ている首の血管がよく見える。血管の上に、指を載せてみたい。

ハサンを眺めるのに夢中になっていて、周りに男性が増え、立っていたところが男性ゾーンに変わっていたことに全く気が付かなかった。ハサンを見つめていると横を大柄な女性が通った。「アスタクフラッラー！」振り向いた。女性が、唇を噛んだまま、白い目で私を見ながら、三回「アスタクフラッラー！」と呟いた。

慌てて性ゾーンから出てきた。

学校が再開されないまま、一月が過ぎた。首都では空襲が一時的に収まっていて、学生が再び大学に通い始めた。

ある朝、大きな声で居間で喋っている母の声で起きた。電話で父と話していた。いつもより声が大きかった。部屋から出て、居間に入った。母が私を見るなり、顔をそらす。なぜか涙を流していた。電話の向こうの父によれば、イラキの軍が一晩で隣町の近くまで侵入してきていた。味方の軍が負けを受け入れるのは、時間の問題だ。そうなれば、逃げるしかない。父は一部の患者とともに一番近くて、安全なイスファハンの病院に送られることになったそうだ。それに先立って、母は私を連れて、父の親戚が居るイスファハンに引っ越すようにと、父から命じられていた。

「こんなすぐに引っ越せないわよ」電話で泣いていた母を残し、居間の椅子に置いてあったチャドルを頭に被って、家を出た。

二十分後、市場の後ろの汚い路地の前に立っていた。一度路地の前を通ったことがあるが、中に入るのは、これがはじめてだ。路地に一歩入った。〝父が帰ってきたら、ドアの大きな罅を直すってこの前の手紙に書いていた〟というハサンの言葉を思い出した。大きな罅が入っている木製のドアを探した。路地の入口から三軒目の古い木製のドアに大きな縦の罅が入っていた。これだろうか。

この辺りでベル代わりに使われている小さなコブシの形をしている鉄製の飾りがドアの中央に付けられていた。鉄のコブシを握った。冷たい。数秒、握ったまま、古いドアを見つめた。ここで何をしているのだろうか。自分でも分からない。

ゆっくりコブシを上げ、下にくっついていた鉄の皿のような土台を軽く叩いた。しばらく経った。何の返事もない。再びコブシを鳴らした。今度は、もう少し強く。

またも、返事がない。

ドアから少し離れ、壁の上から見える二階の窓を覗いた。明かりが点いていない。居ないのだろうか。目をドアの罅に近づけた。隙間から何かが見える。ドアに目を近づけたとき、なぜかその後ろに、人がいる気配がした。

ドアの反対側から人の息を感じる。隙間から、来客は誰な

のか、窺っているのだろうか。
「ハサンの友達です」小さい声で言った。
数秒後、鍵が回る音がしてから、ドアが少し開いた。
片目しか見えない、ハサンのお母さんの顔が現れた。私を一瞬見つめた後、再びドアを閉めた。今度は、ドアの後ろのチェーンが外される音がした。
ドアが猫が一匹通れるぐらいなスペースだけ開き、小さい声で「早く！」と急かされた。体を横にしてドアの隙間から身体を中に滑らせた。
ハサンのお母さんは何も言わずにドアを閉め、再びチェーンをかけた。赤く腫れた目を白いチャドルで拭きながら、小さな中庭の階段を大変そうに、上がり始めた。彼女の後ろから階段を上った。階段が二階の狭いベランダに繋がった。ハサンのお母さんが階段の真正面にあったドアを開けた。彼女の後ろについて、部屋に入った。カーテンが閉められ、電気が消されて真っ暗だった。ハサンのお母さんが部屋の奥にある台所に消えた。ドアの前に立った。台所のドアを少し開けてくれたため、台所で点けていたキャンドルの弱々しい光が居間を少し明るくしてくれた。暗闇に慣れ始めた目を部屋に回らした。部屋の片隅、カーテンが閉まっていた窓の近く、誰か胡坐をかいて床に座っている。
ハサンだ。
数歩ハサンの方へ歩いた。ハサンは無言だ。胡坐をかいて、下を向いたまま、全く動かない。寝ているのか。近く、地面に座った。
ハサンは振り向かない。
しばらく待った。
無反応だ。
「今週中にここから引っ越す」涙声に変わらないように、声を抑える。
返事がない。
「父の親戚が居るイスファハンに行くつもり」
またも返事がない。
「今朝父から電話があった。イラキの軍が隣町まで来ているみたい……父の声は元気そうだったけど、ちょっと心配……」
ハサンは全く返事してくれない。何も言わずに、しばらく無言で座った。台所の方から来るキャンドルの明かりが激しく揺れている。ハサンのお母さんが台所の窓を開けたのか。
再びハサンの方を見る。どうして反応してくれないんだろう。モスクの前であの日、あんなに嬉しそうだったのに。
「軍が大きな攻撃に失敗して、イラキの軍が一気に近づいて来たみたい」適当に話題を見つけてみる。
ハサンの頭がゆっくり上下に動いた。
「知っている……」ようやく喋った！
「俺の父もその攻撃に参加してた」
ハサンの言葉に、凍りついた。この薄暗い部屋、台所にこもっているハサンの母親、無言に過ぎるこの冷たい時間、ハサンの父親に何かあったのだろうか。
「お父さん……無事なの」ハサンを見つめる。
手に汗をかいている。凄まじい戦闘だったと父が電話で言っていた。味方の軍の半数が殺され、半数が銃を置いて逃げ

たらしい。
「ハサン……」涙が無意識に流れ出した。
両手を広げて、ハサンの細い肩を抱きしめたい。ハサンが弱そうで、華奢に見える。指で触れれば真ん中から二つに割れてしまいそうだ。
涙が勢いを増す。ハサンは何も感じないように、ただ座って、下を向いている。
「この町……小さいよ」かすれた声が予想外の言葉を吐いてしまった。
予想もしていなかった答えに、思わずハサンの顔を見つめた。
「噂はすぐに広まる」ハサンは無表情だ。
「何があったの？」
ハサンは問いかけに無言だ。
「お父さん、大丈夫なの？」
「安否は……知らない」ハサンは下を向いたまま答えた。
「俺は昨日まで戦争に行っている英雄の息子だった……」ハサンは突然大きな空笑いをした。
「こんな狭い町で……みんなに知られてしまう……恥をかく毎日が」
何を言えばいいか、分からない。
「俺はかまわないけど……もうすぐテヘランに行って、大学に入って……いいのかもしれない……」先までの静かさと打って変わって、ハサンが喋る。肝心なことを言わずに、ただ喋るだけ。
「だけど、母はこれからもずっとここに住むし、俺がいなくなったら相当辛いと思う」
数秒の無言が過ぎた。
「敵の戦車の数が多すぎて、最後の一人まで殺されるのは確実だった……援護の軍が戦車を送り込んでくれなかった……敵に囲まれた中で、戦う絶望……いつまで経っても戦車が来ない、最初から援護の軍なんか来るはずがなかったんじゃないか……嘘だったんじゃないか……戦闘が怖くなった……押し寄せてくる敵の大きな戦車、次々と倒れていく味方の兵士、目の前で射殺される仲間の姿……一気に強気になる人……一気に弱気になってしまう人……ある時点で、この戦いは意味をなくしてしまう……ただ死んでいくだけの運命……何で最前線にいるのかも……もう分からない……すべてがただ……恐ろしくて……残酷な運命から逃げ出したいその気持ち……」ハサンが早口だ。自分と話している。中に引き止めていた何かをもう抑えられないかのように、次々と吐き出していく。横で、静かに聞いた。
ハサンが突然静まり返った。
振り向いて、彼を見る。
「父が……逃げちゃった」
長いまつげの先に、涙が滲んでいる。

九

翌日から母と二人で、荷物をまとめ始めた。ここに来て、一年弱、荷物はそれほど多くない。ベッドやテーブル、椅子、冷蔵庫などどれもこの短期間で持ってはいけない。

「服とか必需品をスーツケースに詰めて、大きなものは置いていこう。また戦争が終わったら、一度ぐらいは見に来るでしょう。そのとき残されていたら、持って帰りましょう」母が台所を見ながら、残念そうに言った。敵の軍がこの辺りに到着したら、冷蔵庫なんか残してくれない。逆に、ここまで進めば、もう家具なんて、惜しめない。

「このセット……よかったのに」母がいつも紅茶を出している、ポットと六つのグラスのフチに指を回した。

「やっぱり重たいわ」悔しそうに、グラスを元の場所に戻した。

明後日の朝、父の従兄弟がイスファハンから大きな車で迎えに来てくれる。ここで一緒にお昼を食べてから、出発する予定だ。

母は台所を片付け始めた。部屋で服をたたんでいると、ドアベルが鳴った。しばらくして、母が部屋のドアを開けた。

「友達が、外で待っている」

ヒジャブを被って、玄関を開けた。ドアから少し離れた場所で、ハサンが壁にもたれていた。

「もう紅茶出してくれないの？」ハサンが冗談っぽく言った。前回と違って、元気そうだ。

「母が台所の道具を片付けている」本当は、出してあげたい。

「いつ引っ越すの？」

「明後日の昼過ぎ」

「そうなんだ……」ハサンの視線が寂しそうに見える。

「お父さんから……連絡は？」

ハサンが首を横に振った。

「ハサンは？　大学に行くの？」

「たぶん……」ハサンが寂しそうに笑った。

「テヘランに行ったら、テヘラン大学の前に行ってみる。モスク近くのパン屋さんの前で待つのと違って、あの門の前で待つのは、全然恥ずかしくないから」意地悪そうに笑ってみた。ハサンを笑わしたい。ハサンは笑わずに、ただ口元だけを少し緩めた。

「先生がいつも言ってたことを覚えている？」ハサンが突然言い出した。

「どれを？　あの人良く話すから」

「君たちの人生が白い紙のようで、自分でそれに何を書くかで、人生が変わる……そんな話」

「覚えているよ」

「信じる？」

「何を？」

「自分の手で人生を描けることを」

しばらく考えた。

「このごろ、自分の手に負えないような出来事が山のように起きて、完全に賛成できないのかもしれない。でも先生が言ってたのは、中卒の親でも子供が頑張れば、国会議員にもなれるし、医者にもなれる、海外にも行けるし、親が読み書きできなくても本人が頑張れば、大統領にまで昇れる。努力すれば実るという話は、信じてるよ」

ハサンは頷きながらポケットから白い紙を出した。それを真ん中から二等分に折った。

「俺も、努力すれば実ると思うよ」言いながら折ったところを一気に破った。

「でもね、俺が信じてるのは……」

ハサンが破った白い紙の半分を指の間に挟んだまま、見せてくれた。

「自分が描けるのはこの白い紙の、半分だけだ」

ハサンの細長い指に挟まれている白い紙を見つめた。次の言葉をいう前に、ハサンは壁から背を起こし、背筋を伸ばした。

「明日、朝九時モスク前の広場で待っている」そして返事を待たずに、足早に大通りに向かった。

明日の朝、モスク前の広場で何があるのだろう。大学受験の結果が載っている新聞でも配るのだろうか。

翌朝、七時に目が覚めた。二度寝しようとシーツを頭まで被ってしばらくじっとした。眠れない。シーツの間から、目覚まし時計を覗いた。七時四十五分だ。起き上がってベッドに座った。片付けられている部屋が無駄に広い。すべての押入れや引き出しが開けっ放しで、中には何もなく空っぽだ。

昨日、ほとんどの衣類や学校の本などを、部屋の外に置いてあるスーツケースに詰めた。ベッドから降りた。ドアを開ける。居間はとても静かだ。昨日遅くまで、今回持っていけない食器を古新聞に包んでいた母が、居間のソファで寝ている。台所で少し水を飲んだ。

部屋に戻って、再び時計を見た。八時五分前だ。ベッドに座って、部屋の中を見回す。することがない。少し早めに出よう。顔を洗って、居間の椅子に置いてあった母のチャドルを羽織った。静かに玄関のドアを開け、外に出た。朝の空気が新鮮で美味しい。空に雲ひとつなく、透き通った綺麗な青空がどこまでも広がっている。いい日な気がする。肺いっぱい空気を吸い込んだ。大通りをしばらく歩くとモスクのメナラーが見えてきた。八時半ぐらいだろうか。少し早いが、待つのは構わない。歩く速度を増した。

モスクに続く角を曲がったとき、見た光景に思わず足が止まった。モスクの広場の前に、数十台のトラックが駐車していた。トラックの周りを数え切れないぐらいの黒チャドルの

◉そこで、何を、見たのか。歴史の中に息づく人間像

吉村昭 歴史小説集成 全8巻

徹底した史料収集と取材を行い、"歴史の記録者"と称された作家、吉村昭。遺された作品群から、幕末維新期を舞台とする小説を中心に編む。

A5判・上製函入【内容案内進呈】

第1回・第1巻 桜田門外ノ変 生麦事件 定価5880円

第2回・第2巻（5月8日発売）定価5880円 天狗争乱／彰義隊 幕府軍艦「回天」始末

続刊
3 彦九郎山河 長英逃亡
4 落日の宴 黒船 洋船建造 敵討
5 大黒屋光太夫 アメリカ彦蔵
6 ふぉん・しいぼるとの娘
7 冬の鷹 夜明けの雷鳴 暁の旅人 雪の花 梅の刺青
8 ニコライ遺難 ポーツマスの旗 白い航跡

岩波書店
東京・千代田・一ツ橋
（定価は消費税5%込み）
http://www.iwanami.co.jp/

女性が囲んでいた。人ごみが騒がしくて、あちらこちらへと良く動く。

広場に近づいた。この中でどうやってハサンを見つければいいだろう。

先頭のトラックの前に着いた。その上に何十人もの若い男性が乗っていた。ヒゲが生えたて、というよりもまだ生えていない人がいることに驚いた。全員おでこに白い鉢巻を巻いて、首に花の輪が飾られ、肩から長い銃をぶら下げていた。年のせいだろうか、大概はゲームの主人公気分で楽しそうにはしゃいでいた。二番目のトラックも同じ状況だ。十二歳にも満たないように見える男の子が、いきなり立ち上がって、子供らしい声で、〝これから戦争に出るぞー！〟笑顔がこぼれて、とっても楽しそうだ。

トラックの周囲にいる人たちの九割が、女性だ。ハサンが見当たらない。だんだん心配になる。

一つ一つトラックの前を通って、その上に乗っている一人一人の顔を確かめる。ハサンが見当たらない。楽しそうに騒いでいる小さい子、友達のテンションについて行こうと空騒ぎをするその横の子、まつ毛が涙でお互いにくっついているもう少し大人の子、徹夜で泣いたはずの目が真っ赤に腫れた人、静かな人、唇が下に緩んで、必死で涙を我慢している人、母親のチャドルの中に入って堂々と泣く人。各トラックには同じ気持ちを味わっている人たちが乗っていた。決まって、各トラックにみんなを励ます役のリーダー的男性がいた。周囲の女性は全員泣いていた。これから戦場に向かう兵士たちが、母が持ち上げているコーランに一度おでこをつけてから、腰を低くして、神の前にしゃがむようにして、その下を通ってトラックに乗りこんでいく。家で一番大切にしている大きなコーランを両手で持ち上げて、息子をその中から通して、神様と一緒に戦争に行かせようとする母の姿は、息子の無事を必死で願っている気持ちを静かに表していた。

十五台ものトラックの横を歩いた、ハサンが見当たらない。まさか、乗っているはずがない。その楽観的な気持ちとだんだん最後に近づいていく苦しい気分とが混ざり合って、一歩進んでは、立ち止まった。

二十一台目に着いたとき、それを囲んでいた人ごみの中で大きな女性が目を引いた。素早く目を逸らした。見たくない。トラックの横で数秒佇んだ。引き返したい。

誰かに押され、一歩前進した。トラックの後ろの前列に、見覚えのある茶色い髪が視界に入った。強烈な痛みを頭に感じる。

まだ遅くない。その上から、下りてくれれば。突然勇気が湧き出た。トラックの後ろまでの数歩をほぼ走った。

トラックの後ろ、一番前の列に、兵隊の濃い緑の制服を着たハサンが座っていた。朝剃らなかったのか、アゴにうっすらとヒゲが生えていた。柔らかい茶色の髪に鉢巻を巻いて、細い指が、長い銃を握り締めていた。制服のせいだろうか、たくましく見える。母親がトラックの横で、チャドルで顔を隠して泣いているのにも拘わらず、ハサンは無表情で、真っ直ぐ前を向いている。目も表情もすべて乾いている気がする。

手を振った。ハサンは無反応だ。居ることに気付いてくれているのか。

「ハサン」小さく呟いた。人ごみの雑音で、声が消えた。

「ハサン」もう少し大きく言った。前を見ているハサンの目が全く動かない。

「ハサン！」全力で叫んだ。周囲のざわめきが、一瞬だけ収まった。ハサンが茶色い目を人ごみに回らした。目があった。

どれぐらい経っただろう。誰かが、〝ヤーアッラー〟と叫んだ。いよいよトラックの列が動き始める。〝我々が勝つ！〟その人が大きな声で言った。トラックに乗っている人たちが大声で繰り返した。続いて〝神のため、国のため！〟と叫んだ。全員強く唱和する。そして、テレビで見る戦争の映像と共に、いつも流れる歌、〝イエ　イラン〟を全員歌い始めた。強く切ない歌詞に膝が緩む。ハサンを乗せていたトラックが、大量の黒いガスを排出しながらゆっくり動き出した。ハサンの顔がトラックの動きに合わせて、ゆっくり揺れる。私を見ている気がする。無表情な顔が少し歪む。ハサンの母親が路上の反対側で、顔をチャドルで隠して、肩が激しく揺れている。ハサンの表情が黒い排気ガスで曇った。

ゆっくり遠くなるトラックを追うように足が動き出した。

「ハサン、ハサン！」後ろから高い男性の声がする。

「ハサン！」後ろを振り向く。足を地面に引き摺りながら、走る先生だ。

「ハサン、ハサン！」先生が大きな声で叫ぶ。

「受かったんだ！　大学、医学部、受かったよ」先生が叫びながら、紙のような何かを宙で回す。

横に着いた先生が泣いている。一緒に走り出した。トラックが速度を増す。

「ハサン、頼む、下りて！　お願い、下りて！」先生の叫び声が悲鳴にしか聞こえない。

「医者になろう、ハサン、そっちの方が国が助かるから、ほんとだから信じて！」

遠くなるハサンの顔が黒い排気ガスに包まれ、もう表情が見えない。

立ち止まった。

「ハサーン！」先生が全力で叫んだ。

膝が体重を支えきれない。地面に座り込んだ。先生が横で顔を両手で摑んで大声で「どうして、どうして！」と叫ぶ。

一つの点になって行くトラックの列を見つめる視界が曇る。ハサンと一言も交わせなかった。

二十一台もの大きなトラックが消え去った。

土埃に包まれている黒チャドル姿の女性たちがお互いを強く抱きしめ、泣いている。チャドルが頭の半分までずり落ちているハサンのお母さんが、真っ赤に腫れ上がっている顔に小さくなった目を細め、去っていく息子の最後の姿を目に焼きつけようとしている。

濃い緑のトラックの列が視界から消えた。何百人もの白い紙を乗せたまま、黒い排気ガスとともに、走り去った。

〈了〉